

# 室尾石生谷口古墳ほか

主要地方道津山智頭八東線  
改良工事に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会

# 室尾石生谷口古墳ほか

主要地方道津山智頭八束線  
改良工事に伴う発掘調査

1998

岡山県教育委員会



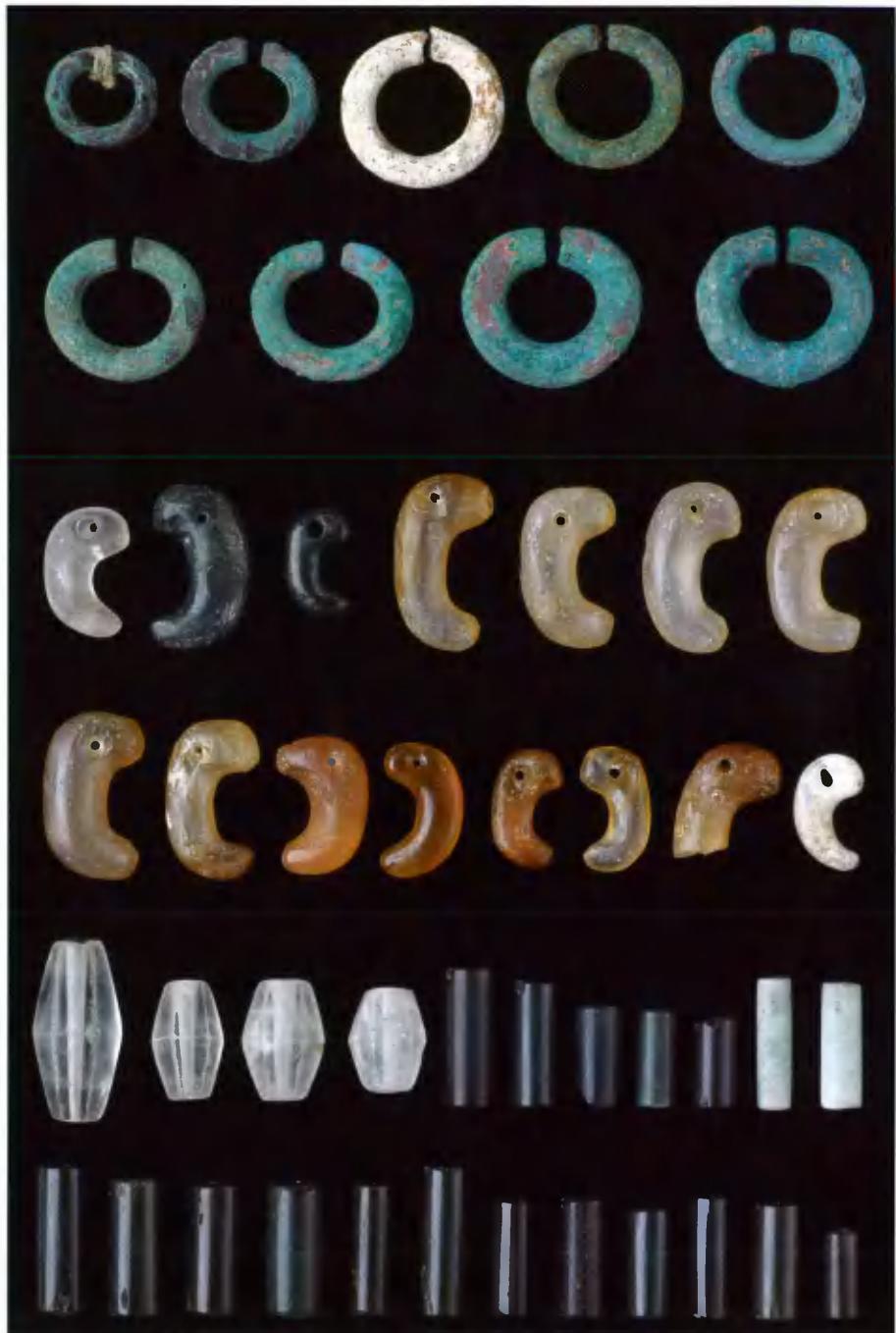
1 室尾石生谷口古墳  
石室（南から）



2 石室内から外景を  
のぞむ（北から）



3 盛土内の石列  
(南東から)



石室内出土遺物〈玉類〉(1/1)

## 序

本報告書には、苦田郡加茂町大字青柳に所在する、室尾石生谷口古墳とその周辺の鉄滓散布地の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、主要地方道津山智頭八東線の改良工事に伴う発掘調査です。津山智頭八東線は、県北東部の津山市と鳥取県の智頭町、さらに八東町を結ぶ主要地方道の一つです。この県道は加茂町の市街地を過ぎると鳥取県境まで幅員が狭く、一刻も早い改良工事が必要とされていました。津山地方振興局は、一部の改良工事を施工していましたが、平成8年度施工区間の立木伐採を行った際、用地内に古墳が存在することが明らかとなりました。これを受け岡山県教育委員会では、この改良工事予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と協議調整を重ねてきました。その結果、設計変更などによる古墳の現状保存が困難なため、やむなく記録保存のための発掘調査を行うこととなり、平成8年度に一次調査を、引き続いて平成9年度に全面調査を実施いたしました。

平成8年度の一次調査では、古墳規模の確認と周辺に分布する鉄滓の性格把握を行い、平成9年度の全面調査では、この古墳の全貌を明らかにすることが出来ました。特に横穴式石室の中からは、多量の須恵器、馬具や鎌などの鉄製品、そして100点を超える玉類などが出土し、また古墳を構築中に整然と築かれた石列も発見されました。この様に整った石列の例は県下でも希有なものであります。これら本古墳は、加茂町内では万燈山古墳に次ぐ規模と副葬品の内容であり、加茂川水系下における重要な位置を占めていたものと思われます。しかも古墳の内部主体だけでなく、構築方法などの全貌が明らかになったことは大きな成果であったといえます。なお近世の鉄滓集積地を一か所発見しましたが、製鉄遺構の発見には至りませんでした。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりか、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の研究のための資料として広く役立つならば幸いと存じます。

発掘調査および報告書の作成に当たっては、岡山県文化財保護審議会委員の先生方をはじめ、津山地方振興局、加茂町教育委員会ならびに関係各位から賜りました多大なご指導とご協力に対し、厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 篠 本 克 之

## 例　　言

1. 本書は、岡山県教育委員会が、苦田郡加茂町大字青柳における主要地方道津山智頭八東線改良工事に伴い、津山地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成8・9年度に発掘調査を実施した、室尾石生谷口古墳とその周辺の鉄滓散布地の発掘調査報告書である。
2. 室尾石生谷口古墳と鉄滓散布地は、苦田郡加茂町大字青柳字石生谷口1867—17ほかに所在する。
3. 発掘調査は、一次調査を柴田英樹が平成8年9月25日に行い、全面調査を内藤善史・小林利晴が平成9年4月8日～6月26日の期間行った。
4. 発掘調査に当たっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両先生方から御指導・御助言をいただいた。
5. 報告書の作成および遺物整理は、小林が岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325—3）において行った。
6. 本文の執筆は、内藤・小林が分担して行い、第1・2章を内藤が、第3・4章を小林が執筆した。
7. 本書の編集は小林が担当した。
8. 本報告書における鉄滓の分析は、大澤正己氏（株式会社九州テクノリサーチ）の協力を得た。
9. 出土遺物、実測図、写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325—3）において保管している。

## 凡　　例

1. 報告書に記載された高度値は海拔高であり、方位は国土座標系の座標北を示す。
2. 本報告所記載の各遺構・遺物実測図は、下記のとおり統一する。

遺構	古墳1／100	古墳石室1／40	
遺物	土器1／4と1／6	金属器1／2	玉類1／1と1／2
3. 遺物番号は、各遺物の材質ごとの連番である。
4. 遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについては下記の略号を番号の前に付した。  
金属器：M 玉類：J
5. 土器実測図中で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があるものを示す。
6. 遺物名については、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように省略して用いる。
7. 報告書中に用いる時代区分は、1世紀を4分割して表現する。
8. 第2図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（美作加茂・橋）を83%に複製し、加筆したものである。

## 目 次

序  
例 言  
凡 例  
目 次

第1章 地理的・歴史的環境 .....	1
第2章 発掘調査の経緯と経過 .....	3
第1節 発掘調査にいたる経緯 .....	3
第2節 発掘調査の経過 .....	3
第3章 室尾石生谷口古墳ほかの調査 .....	5
第1節 調査の概要 .....	5
第2節 室尾石生谷口古墳の調査 .....	9
第3節 鉄滓散布地の調査 .....	29
第4章 ま と め .....	30

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 .....	1	第20図 石室奥側出土遺物 2 <須恵器> (1/4) .....	20
第2図 周辺の遺跡分布図 (1/30,000) .....	2	第21図 敷石下出土遺物 <須恵器> (1/4・1/6) .....	21
第3図 調査区位置図 .....	5	第22図 敷石上出土遺物 <須恵器> (1/4) .....	22
第4図 調査区内地形図<調査前> (1/200) .....	6	第23図 石室覆土内出土遺物 <須恵器> (1/4) .....	23
第5図 調査区北壁断面図 (1/80) .....	7	第24図 石室入口部出土遺物 <須恵器> (1/4・1/6) .....	23
第6図 古墳横断面図 (1/80) .....	8	第25図 墳丘盛土内出土遺物 1 <須恵器> (1/4・1/6) .....	24
第7図 古墳縦断面図 (1/80) .....	8	第26図 墳丘盛土内出土遺物 2 <須恵器> (1/6) .....	25
第8図 室尾石生谷口古墳 (1/100) .....	9	第27図 鉄刀 (1/3) .....	25
第9図 石室横断面図 1 (1/80) .....	10	第28図 石室内出土遺物 <鉄製品> (1/2) .....	26
第10図 石室横断面図 2 (1/80) .....	10	第29図 石室内出土遺物 <耳環・玉類 1 > (1/2) .....	27
第11図 周溝断面図 (1/80) .....	10	第30図 石室内出土遺物 <玉類 2 > (1/1) .....	28
第12図 閉塞石平断面図 (1/40) .....	11	第31図 鉄滓集積地平断面図 (1/30) .....	29
第13図 石室上面と堀方 (1/60) .....	12	第32図 石材の種類分け .....	31
第14図 石室実測図 (1/40) .....	13・14	第33図 万燈山古墳と室尾石生谷口古墳 (1/150) .....	32
第15図 石室天井石見上げ図 (1/40) .....	15		
第16図 石列平断面図 (1/50) .....	16		
第17図 石室内遺物出土状況 1 (1/40) .....	17		
第18図 石室内遺物出土状況 2 (1/40) .....	17		
第19図 石室奥側出土遺物 1 <須恵器> (1/4) .....	19		

## 図 版 目 次

卷頭図版 1-1 室尾石生谷口古墳石室（南から）	5-1 石室奥側出土須恵器 2 (1/4・1/6)
2 石室内から外景をのぞむ（北から）	2 敷石下出土須恵器 (1/4・1/6)
3 盛土内の石列（南東から）	3 敷石上出土須恵器 1 (1/4)
2 石室内出土遺物<玉類> (1/1)	6-1 敷石上出土須恵器 2 (1/4・1/6)
図版 1-1 調査前調査区全景（南から）	2 石室入口部出土須恵器
2 古墳全景（南から）	3 石室覆土内出土須恵器 (1/4)
3 古墳全景（北東から）	4 墳丘盛土内出土須恵器 1 (1/4・1/6)
2-1 石室内遺物出土状況（南から）	7-1 墳丘盛土内出土須恵器 2 (1/6)
2 石室敷石（北から）	2 石室内出土鉄製品 (1/2)
3 石室完掘（南から）	8-1 表採鉄刀 (1/3)
3-1 盛土内石列（東から）	2 石室内出土玉類 (1/1)
2 石室裏込めと堀方（北東から）	3 石室内出土人骨 (1/2)
3 鉄滓散布地（南から）	
4 石室奥側出土須恵器 1 (1/4)	

## 表 図 版

第1表 鉄器観察表 .....	33
第2表 玉類観察表 .....	34

## 第1章 地理的・歴史的環境

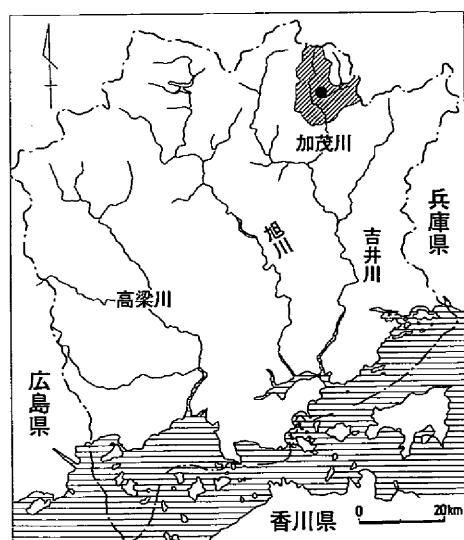
室尾石生谷口古墳ほかは、苦田郡加茂町青柳に所在している。

加茂町は、県の北部東寄りで鳥取県と境を接している。中国山地に抱かれたかなり広い町域の大部分は山林で占められ、それぞれ山間部を削り流れ下る谷川が、合流点で小さな平地をつくり出しているのみである。中国山地の県境に源を発する物見川と阿波川が合流した加茂川は、同じく中国山地に源を発し、南流してきた倉見川を合わせ、一段と河幅を広げながら南流して津山市で岡山県の三大河川の一つ吉井川に流れ込んでいる。この加茂川が倉見川と合流する一帯には、町内で最も広い平地（加茂盆地）が形成され、現在では町の中心的役割を担う地域となっている。

室尾石生谷口古墳は、加茂川に面した丘陵の急斜面が僅かに緩んだところに築かれ、眺望は非常に良好で、南には加茂盆地の東部一帯を見わたすことができる。

加茂町内においては、最も早い時期の遺物として青柳・知和・宇野などで縄文時代の土器片（早期・晚期）が若干確認されている。しかし、確かな足跡が認められるのは、弥生時代中期以降である。青柳・宇野・百々などを中心に出土する土器などの量も増大し、青柳・中原・宇野では後期の竪穴住居が確認され、丘陵部や段丘上での集落形成が顕著になっている。集落遺跡については、本格的な発掘調査が行われていないため、遺跡の詳細については判然としないが、集落形成は古墳時代以降も引き継がれ、次第に拡散されているものと考えられる。これらの集落では当然水田が営まれていたであろうことは推測されるが、低地部分は極めて狭小であり、大規模な集落が営まれるほどの多大な生産能力を期待することはできない。一方、加茂町内では40基程の古墳が確認されているものの、大半は加茂盆地に面した丘陵上に立地している。発掘調査例が少なく詳細については不明であるが、ほとんどは古墳時代後期に築かれた小円墳である。特に、塔中地区には10基程の群集墳が形成され、近接して加茂町内最大の古墳である万燈山古墳が所在している。万燈山古墳は直径24m・高さ4m以上を測る円墳で加茂盆地を見下ろす丘陵端部に位置しているが、周辺の小古墳とは性格を異にする単独墳と考えられるもので、全長約11mの巨大な横穴式石室を有する。石室内は盜掘されていたが、直刀・刀子・鉄鎌などの武器類をはじめ、轡・辻金具・雲珠・馬鈴などの馬具類や耳環・勾玉・管玉・切子玉などの装身具と豊富な副葬品が出土し、地域の首長墓以上を推測させる。築造は、室尾石生谷口古墳とほぼ同時期の6世紀第4四半期である。なお、この古墳には鉄滓が供献されており、被葬者が製鉄に関係していることを推測させる。加茂町内では、鉄滓の散布地やたたら跡・カンナ流しの遺跡など、古代から中・近世にかけて多くの製鉄関連遺跡が確認されている。このうち、倉見川を遡った黒木地区のキナザコ製鉄遺跡は、山間部の比較的急な斜面に立地しているが、発掘調査により8世紀後半に操業していたことが明らかにされた。加茂町内には、平地が少なく可耕地は限られているが、豊かな森林資源を利用したたら製鉄がさかんに行われていた。

（内藤）

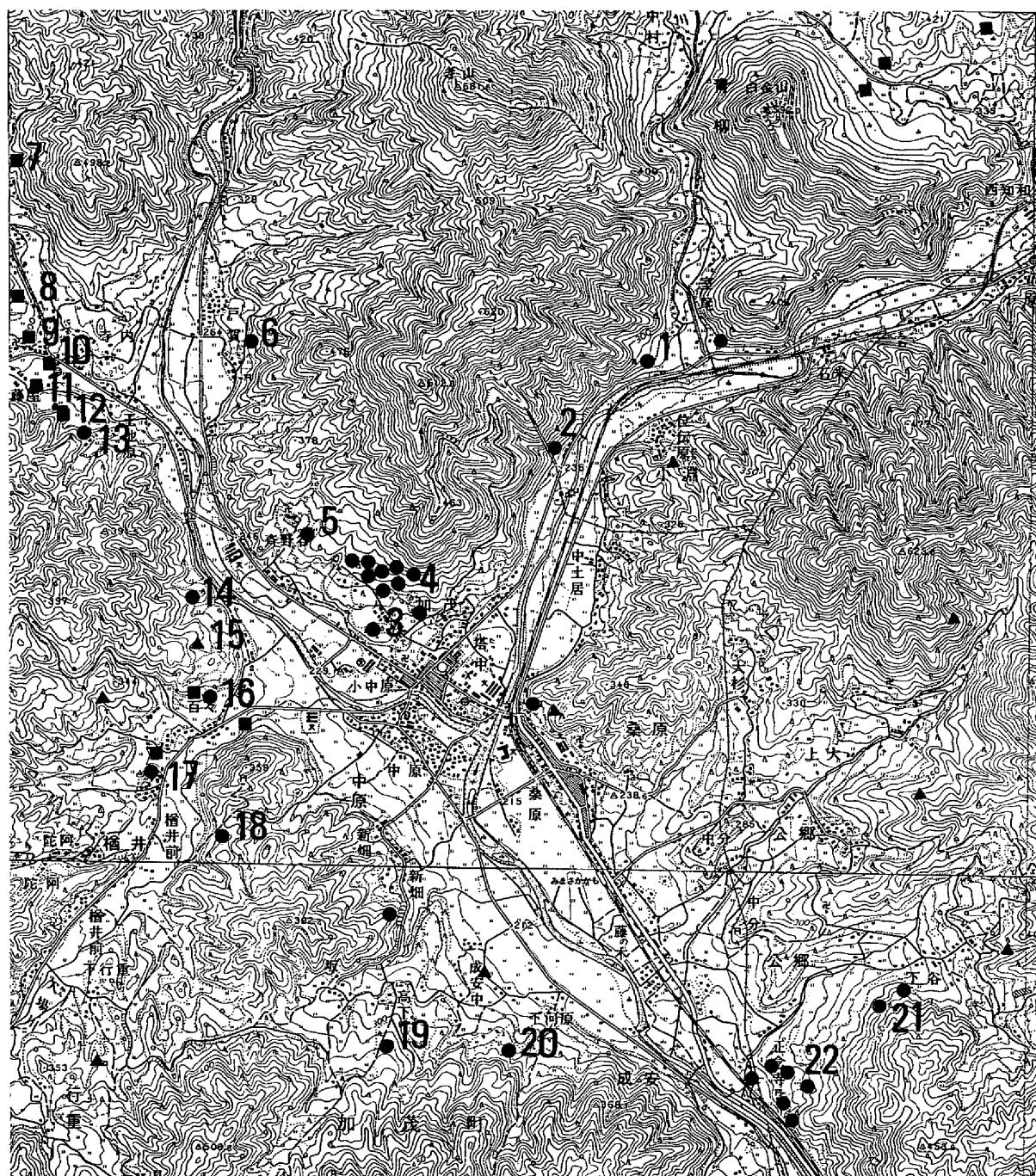


第1図 遺跡位置図

### 参考文献

『万燈山古墳』岡山県苦田郡加茂町文化財保護委員会 1973年

キナザコ製鉄遺跡調査団『キナザコ製鉄遺跡』岡山県加茂町教育委員会 1973年



1 室尾石生谷口古墳	8 国木散布地C	16 常道地下式古墳
2 室尾墳寺古墳	9 国木遺跡A	17 樋井陀阿古墳
3 万燈山古墳	10 藤屋散布地	18 古墳
4 塔中1～3号墳	11 王地原散布地B	19 成安1号墳
上原1～6号墳	12 王地原散布地A	20 成安2号墳
5 斎ノ谷古墳	13 王地原古墳	21 正念寺1・2号墳
6 戸賀火ノ釜古墳	14 鎌倉古墳	22 正念寺3～6号墳
7 国木散布地B	15 鎌倉遺跡A	

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/30,000)

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査にいたる経緯

主要地方道津山智頭八東線は、岡山県北部の中心都市津山市を起点に、苫田郡加茂町を経て鳥取県八頭郡智頭町から同郡八東町まで、山陰と山陽を結ぶ主要道の一つである。岡山県内の津山市から加茂町にかけては、吉井川に流れこむ加茂川・物見川にほぼ沿って北上している。このうち、加茂町青柳から県境の物見峠にかけては、道幅の狭いところや曲がりくねったところが続く交通の難所であり、平成7年度から岡山県津山地方振興局により改良工事が実施されている。

平成8年度、実施工区の青柳地内での立木伐開時に『岡山県遺跡地図第2分冊』に記載されている室尾石生谷口古墳の大部分が用地内にかかることが明らかとなった。このため、岡山県教育庁文化課は、平成8年8月20日付けで津山地方振興局長から文化財保護法第57条の3に基づく協議書を提出させ、関係部局と保存協議を行ったが、設計変更などによる古墳の現状保存は困難であることから、まず全面調査を視野に入れた一次調査を実施することになった。調査は、平成8年9月25日に古墳および古墳周囲の平坦面などに6本のトレッチを設定して行った。

調査の結果、横穴式石室を有する径15m程度の古墳のうち、石室部分が路線内に含まれていることが明らかになった。また、古墳周辺の平坦面や緩斜面には鉄滓の散布が認められたものの、そのほかに遺構や遺物などは確認されなかった。

岡山県教育庁文化課は、一次調査の結果を基に津山地方振興局と遺跡の取り扱いについて協議を行い、岡山県古代吉備文化財センターに依頼し、古墳およびその周辺の鉄滓が散布している平坦面や緩斜面について平成9年度に発掘調査を実施し、報告書を刊行することになった。 (内藤)

### 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成9年4月から調査員2名で着手した。古墳の現状は、横穴式石室の天井石上部および入口部の側石上部が露呈していた。また、石室内には土砂が流入し、石室開口部付近では天井石から20~30cm程の隙間を残すのみであった。調査はまず、石室入口部堆積土の掘り下げを行い、先端部で閉塞施設の一部を検出した。床面には敷石が敷きつめられていた。次いで、奥側の堆積土を除去して内部の調査を行った。この古墳はすでに盗掘を受けて、土器など副葬品の一部は持ち出されていたが、床面および堆積土中から須恵器の壺や杯などの土器類をはじめ、玉類や耳環など多種多様の遺物が豊富に出土し、中には、元位置を留めているものも認められた。

墳丘の調査では、石室に沿って石列が確認され、裾部など一部で葺石が遺存していた。特に、東側の石列は良好な状態で検出された。周溝は、用地内から部分的に検出されたのみである。

古墳の周囲に散布していた鉄滓は、流れ込みによるとみられる堆積のみで、用地内においてこれに伴うとみられる遺構などは検出されず、6月末にすべての調査を終了した。

報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて平成10年1月から3月まで1名が専従して行い、平成9年度に印刷・刊行されることになった。 (内藤)

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 調査の体制

#### 平成8年度

##### 岡山県教育委員会

教 育 長	森崎 岩之助
教育次長	黒瀬 定生
岡山県教育庁文化課	
課 長	大場 淳
課長代理	松井 英治
参 事	葛原 克人
課長補佐	
(埋蔵文化財係長)	平井 勝
主 査	若林 一憲
文化財保護主事	柴田 英樹(調査担当)

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所 長	河本 清
次 長	高塚 恵明
文化財保護参事	正岡 瞳夫
総務課	
課 長	丸尾 洋幸
課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
主 査	木山 伸一
調査第一課	
課 長	高畠 知功
課長補佐(第一係長)	江見 正己

#### 平成9年度

##### 岡山県教育委員会

教 育 長	黒瀬 定生
教育次長	平岩 武

##### 岡山県教育庁文化課

課 長	高田 朋香
課長代理	西山 猛
参 事	葛原 克人
課長補佐	
(埋蔵文化財係長)	平井 勝
主 事	三宅 美博

総務課	
課 長	小倉 昇
課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
主 査	木山 伸一
調査第三課	
課 長	柳瀬 昭彦
第三係	
課長補佐(第三係長)	下澤 公明
文化財保護主幹	内藤 善史(調査担当)
主 事	小林 利晴
	(調査・報告書担当)

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所 長	籾本 克之
次 長	正岡 瞳夫

### 日誌抄

#### 平成8年度

9月25日 一次調査実施

#### 平成9年

4月1日 発掘調査準備開始

4月8日 発掘器材搬入、発掘調査開始

4月23日 羨道部堆積土掘り下げ開始

5月9日 石室閉塞石実測

5月15日 玄室堆積土掘り下げ開始

6月2日 石室内清掃、写真撮影

6月3日 石室実測開始

6月6日 墳丘測量

6月9日 墳丘盛り土掘り下げ開始

6月10日 墳丘東側石列実測開始

6月24日 現地説明会開催

6月26日 発掘器材撤収

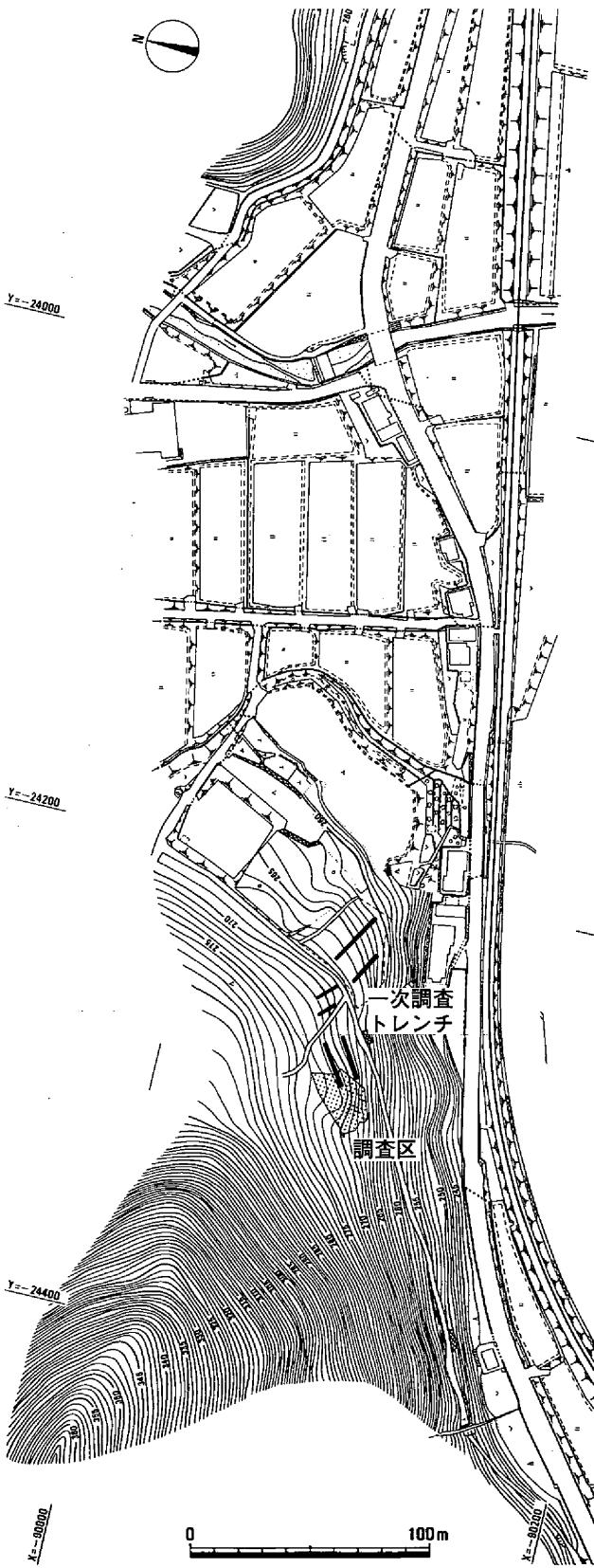
6月30日 発掘調査終了

## 第3章 室尾石生谷口古墳ほかの調査

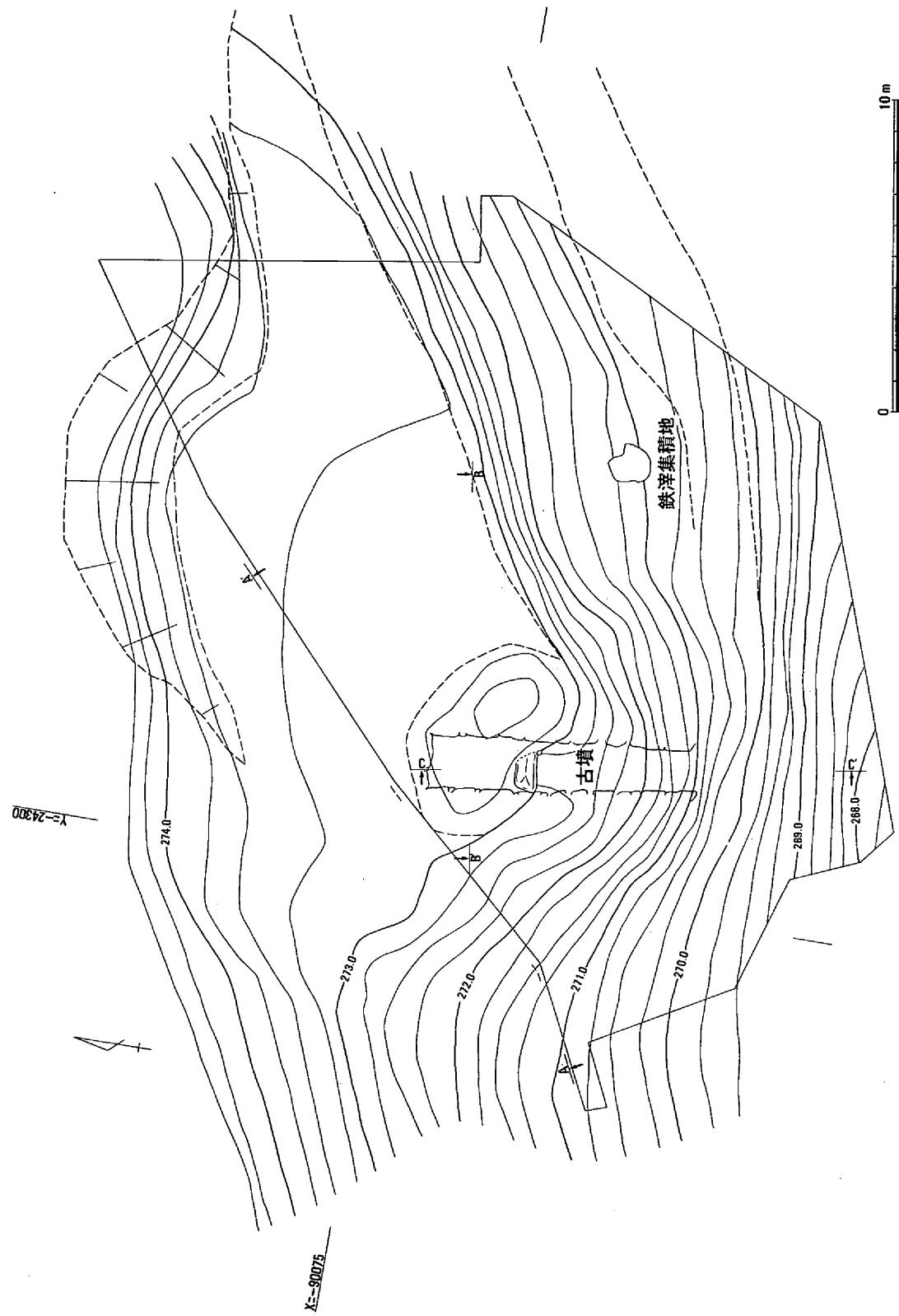
### 第1節 調査の概要

平成8年度の一次調査は、工事予定地内から古墳が発見されたという知らせを受けて始まった。現地に駆けつけてみると、発見された古墳は、横穴式石室を内部主体とする古墳であることがわかり、また用地内には鉄滓の分布も認められた。このため発見された古墳の現状把握、鉄滓の分布に伴う製鉄遺構の検出、工事予定地内における他の古墳の発見などを目的に、6本のトレンチを設定した。調査の結果古墳の周溝が検出され、これにより、古墳は全長15m前後の円墳であることが判明した。一方鉄滓は用地内各地に点在するものの、集積地などは認められず、製鉄遺構なども発見されなかった。また発見されている以外の古墳も確認されなかった。一次調査では、トレンチ内から遺物は出土しなかったものの、用地内で鐵刀（M1）が1本表面採集された。

一次調査の結果を受けた平成9年度の全面調査は、発見されている古墳の全体像把握と鉄滓の散布地の把握を目的とする。調査前から横穴式石室は一部開口しており、天井石が奥壁側から5石まで現存していることを確認できた。古墳は石室の南西側から南側にかけて特に保存率がよく、円形になる墳形を把握できる。しかし北東側は平らな地形になっており、石室から14mほど離れた地点では山を削平した箇所などもある。また等高線の最高地点は石室の上面にはならず、東側へ少しづれる。これらのことから、古墳の北東側は後世にかなりの造成が行われたと判断される。石室の天井石も一部露出しており、盛土の上半はすでに失われている。これらの状況を考



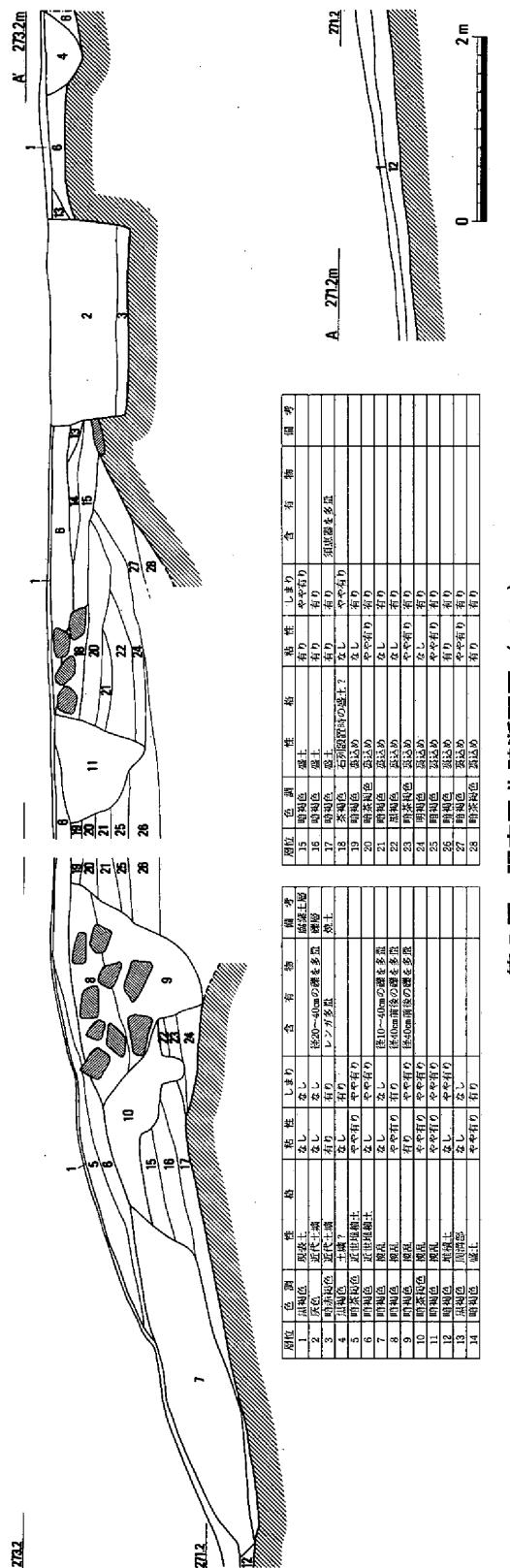
第3図 調査区位置図



第4図 調査区内地形図<調査前>(1/200)

慮し、古墳の墳端を把握するため、調査区北壁断面・古墳横断面・古墳縦断面を設定した。一方鉄滓は特に古墳の東側に散布しているが、散布地内から集積地点が1箇所発見された。

調査区北壁断面は調査区の北端に位置し、石室奥壁のやや北側に当たる（第5図）。7～11層は搅乱であり、これらより上層に当たる5・6層はかなり新しい堆積土となる。墳丘盛土は14～17層が残るのみで、上半部の大半が失われていることがわかる。特に断面図の右側に当たる東側はフラットな



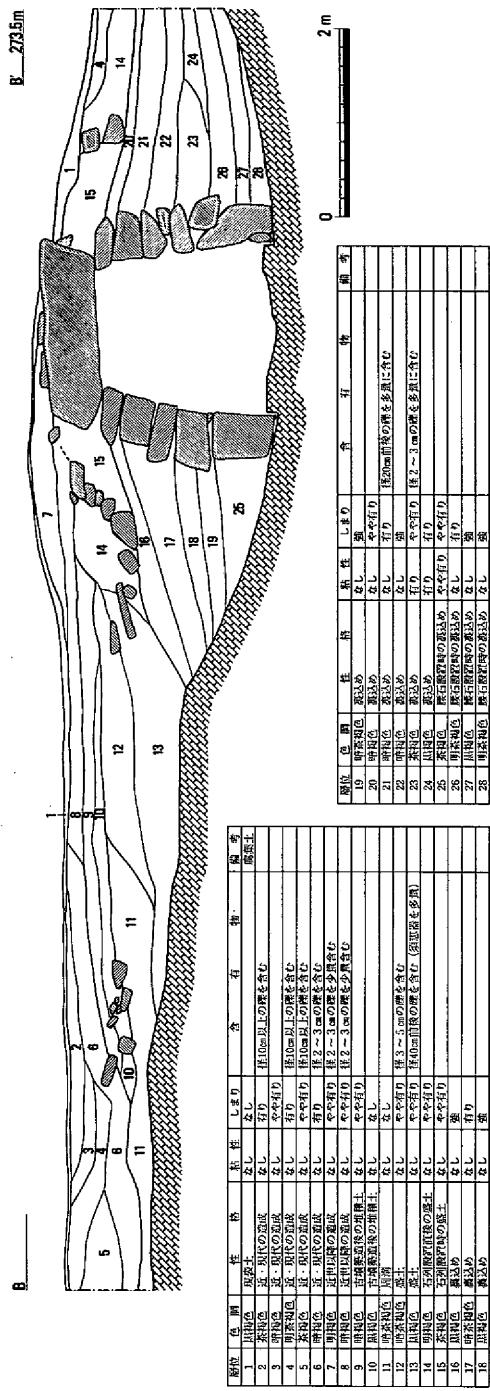
調査区北壁断面図 (1/80)

第5図

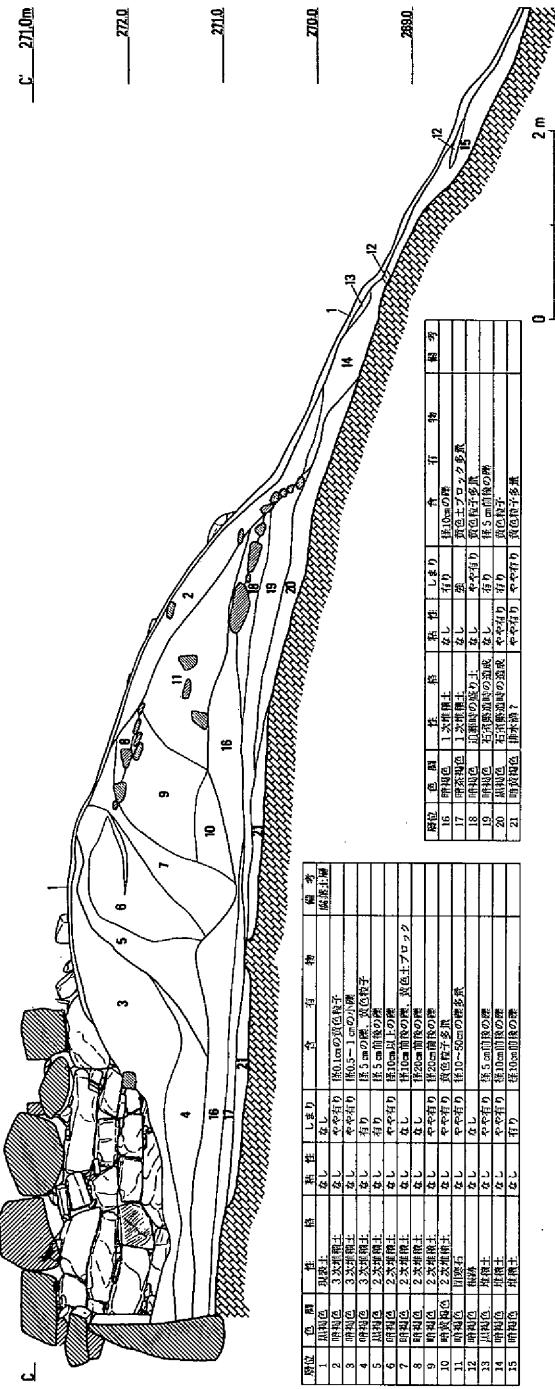
面になっており、造成の跡が伺える。古墳の墳端部は、東側では2・3層の近代土壌によって、西側では7層の搅乱によって正確な位置がつかめない状態である。一次調査で確認された周溝は13層に当たり、古墳の東側のみに存在し西側には存在しない。また17層の盛土からは多量の須恵器が出土する。調査前の地形から比較的良好であると思われた西側でも、かなりの搅乱を受ける。特に8・9層の搅乱は、石室の裏込めをかなり切り込んでいる。このことから古墳の北側の保存状態は良好でなかったことがわかる。

古墳横断面(第6図)は、特に東側(図上では左側)に当たる部分の造成を把握するために設定した。2~6層は近・現代の造成あととなる。調査区付近の地山は暗黄褐色を呈した砂質の層になるが、この土層が2・4・5層などに混じる。おそらく造成時に地山まで掘り下げられた層を盛ったものと思われる。8層は、しまりも多少有り盛土と間違えやすいが、中から寛永通宝が出土しており、近世以降の造成土となる。これらの造成土を取り除くと天井石が完全に露出する。つまり墳丘盛土の上半部は、完全に失われた状態である。ただし墳端部は残存しており、13層と地山の接点がそれになるであろう。この結果古墳は、築造時に地山まで掘り下げ、その直上に構築したことになる。また13層からは多量の須恵器の破片が含まれる。特に甕や瓶類が碎かれた状態で出土する。墳丘築造時に祭祀を行った跡であろうか。11層は周溝部の覆土になる。ただし東側には肩がなく、なだらかに終わる。15層の直上には石列がある。これは石室築造の最終段階に構築されたものである。詳細は後出するが、石室および裏込めを保護する役割があったものと思われる。16~28層までは、石室構築時の裏込めになる。これらの層は30~40cm前後の層で、縞状に積み上げられ、かたく締め付けられる。石室の掘り方は地山まで掘り下げており、断面形状は皿状になる。

古墳縦断面(第7図)は、南北方向の墳端と石室内の覆土を把握するため設定した。2~4層は最も新相な堆積土である。5~10層も堆積土になると思われるが、特に5~7層は不自然な堆積になり、堅くしまった層である。これらの層は盗掘坑か崩落土になる可能性もある。16・17層は最も古相になる堆積土である。19・20層は、石室築造時に斜面となる南側を造成したものである。これらの下層は



第6図 古墳横断面図（1/80）



第7図 古墳縦断面図（1/80）

保存状態がよく、20層と地山の境をもって墳端になる。この地点は、石室の奥壁から10m地点である。21層は、石室の奥側から入口部に向かって溝状にのびる層である。おそらく石室築造用の排水溝になるであろう。石室内にはその他に、縦断面にかかる程度の盗掘坑が2つ存在するが、比較的保存度が良好であることが判明した。

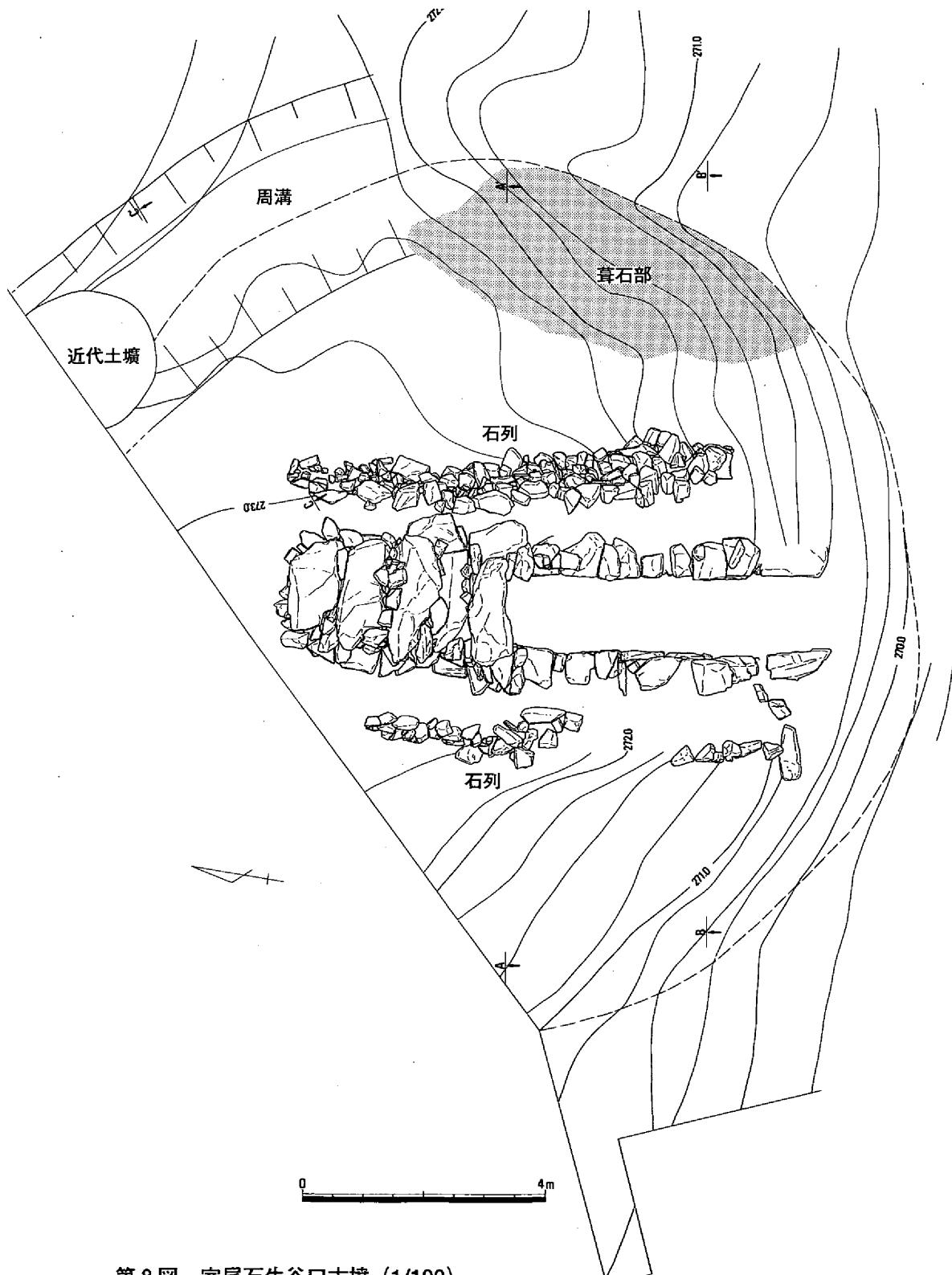
これら3つの土層断面から、古墳は墳丘盛土の上半部の大半が失われているものの墳端部分は残存すること、西側部に部分的な搅乱があること、石室内は数回盗掘を受けているものの保存度が良好であること、などが判明した。また古墳直下の層は地山となり、それ以前の包含層は存在しない。この結果調査適用構造は、古墳1基、鉄滓集積地1カ所となる。

(小林)

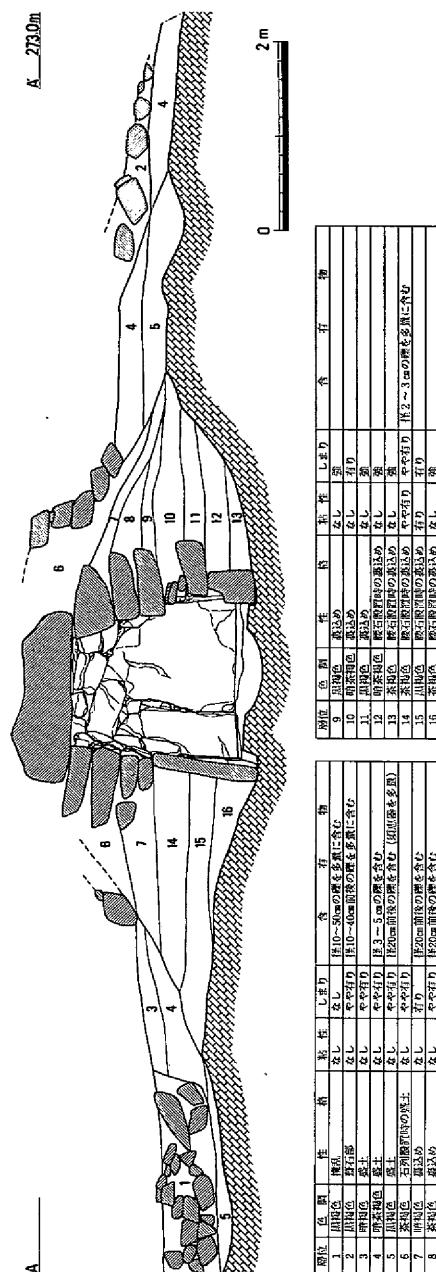
## 第2節 室尾石生谷口古墳の調査

### 室尾石生谷口古墳（第8・9・10・11図）

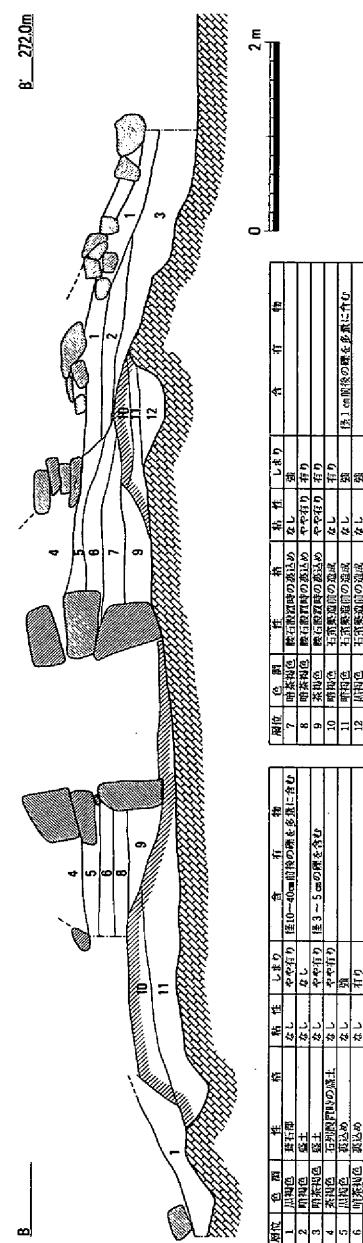
室尾石生谷口古墳は、調査区の西側に位置する。一次調査の時、トレンチ内で周溝の上面を確認し、横穴式石室を内部主体とする円墳であることが確認された。全面調査では、先述した3本の断面を基



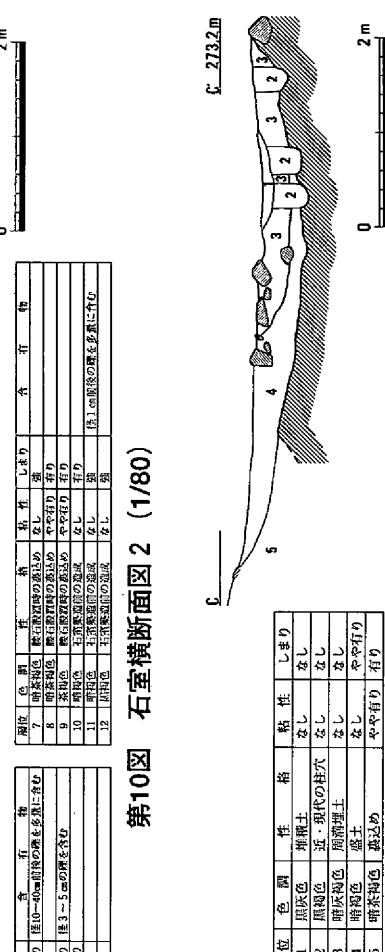
第8図 室尾石生谷口古墳 (1/100)



第9圖 石室横断面図1 (1/80)



第10図 石室横断面図2 (1/80)



第11図 周溝断面図 (1/80)

に堆積土を取り除いた。その結果、第8図のような全体像になる。古墳は全長14.3mの円墳である。墳丘は斜面を利用して構築され、地表面は北側の標高が高く、南側が低くなる。両者の高低差は2.5m前後になる。西側は撓乱によって破壊されているが、東側の特に石室入口部に近い側には、石材を盛土内に含ませ、積石塚状になる葺石部が存在する。ここに使われる石材は、径10~50cm前後の石室と同じものを使用する。この葺石部は石室の入口側のみに存在し、後側に当たる北側には存在しない。一次調査で確認された周溝は、古墳の北側から北東側にかけて存在し、東側付近で不明瞭になり始め、葺石部付近では自然消滅する。この周溝がある付近は山側に当たり、地形が高まる箇所である。そのため山側の地形から古墳を区画するために周溝が構築された。

この円墳は自然地形を利用し、石室の入口部を後側より低くすることで、視覚的に大きく見せている。葺石が入口側のみに存在するのも、同じ理由であろう。また石室入口部付近は、地形の勾配が急であり、前庭部などは存在しない。

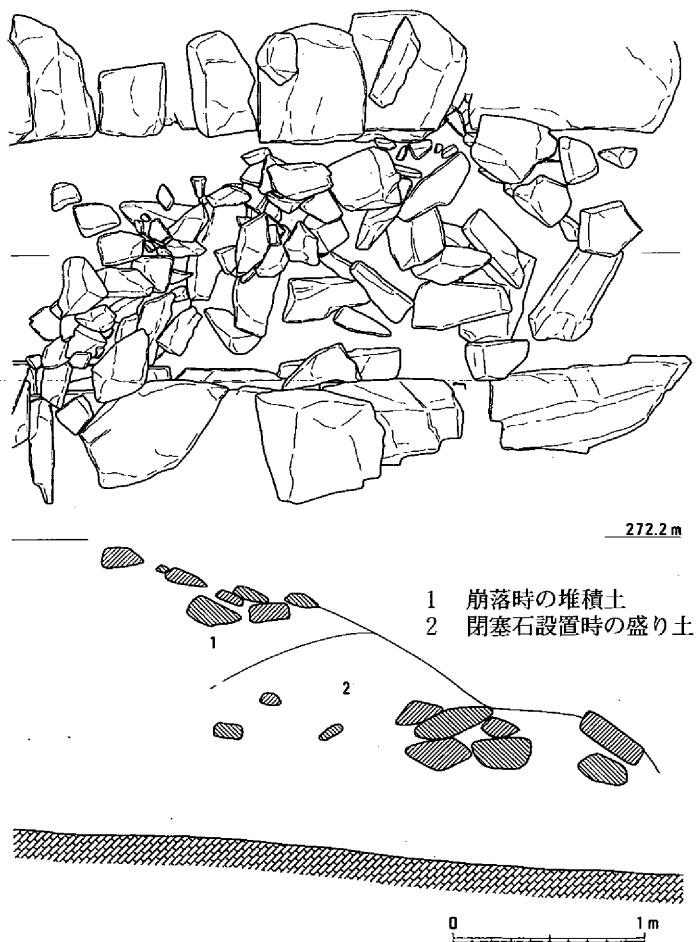
石室の構築方法の確認のため、石室横断面1・2を設定する。石室横断面1（第9図）は、古墳の中央部に位置する。1層は搅乱である。2層は葺石部に当たり、黒褐色土に多量の礫が混じる。石室の構築方法は、地山を断面形状で皿状に掘り込み、腰石を縦に置く。この部分の裏込めは、茶褐色や黒褐色の土を20~30cmずつ交互に堅くしめる。12~16層がそれに当たるが、最もしまりが強い。腰石より上の石は、横に寝かして使用する。石を1列置くごとに、裏込めを20~40cmの単位で堅くしめる。7~11層がそれに当たるが、堆積状況は縞状になる。天井石をのせた後に、茶褐色でしまりがやや有る6層で石室を覆い、石列を構築する。さらに本来は、この上に4・5層などの盛土をのせて墳丘を完成させる。石室の堀方は、断面形状が左右どちらかに偏ることなく、皿状で両側がほぼ均等になる。石材の積み方は、西側はほぼ一直線になるが、東側は内側へ持ち送りが激しくなる。

石室横断面2（第10図）は、石室の入口付近に設置する。腰石を縦に使用したり、それ以降の石材を横に寝かして使用する方法は、横断面1と同じである。横断面1との違いは、石室の掘り方を掘る前に、暗褐色や黒褐色土によって造成しているところである。これは石室入口部に向かって下がってきた地形を補正する目的があるのであろう。またこの造成土には、両脇に掘り込みがある。

周溝の断面形態は、皿状になる（第11図）。周溝部は3層であり、深さは40cm前後で北側に行くにつれて浅くなり、南側に向かって自然消滅する。またこの周溝は墳丘側に明瞭な肩を持たない。周溝の機能より、区画溝としての役割が大きかったと思われる。

#### 閉塞施設（第12図）

閉塞施設の残存度は良好ではなく、築造当時は現状より高く積み上げられていたものと思われる。残存している部分で、石室南端部から2.2mの幅をもつ。現状での最高地点は南端部から1.3m離れたところであり、礫を2・3段積み上げ、暗黄褐色の土層と混ぜ合わせている。使用された石材は石室に使われた石材と全く同材であり、径20~40cm程度のものである。これらの石材は、特に面を形成しているわけではなく、バラバラに置かれる。最高地点より南側は比較的大きめの石材を使用し、礫の密度が盛り土の密度より高くなる。最高地点より北側は比較的小さめの石材を使用し、盛り土の密度の方が高くなる。この閉塞石は石室内の敷石の上面まで達しており、敷石と区別の付かないところもある。また石室入口部側へはみ出すした礫も多い。なお1層は崩落土に径10~30cmの礫が多量に混じったものである。



第12図 閉塞石平面図（1/40）



第13図 石室上面と堀方 (1/60)

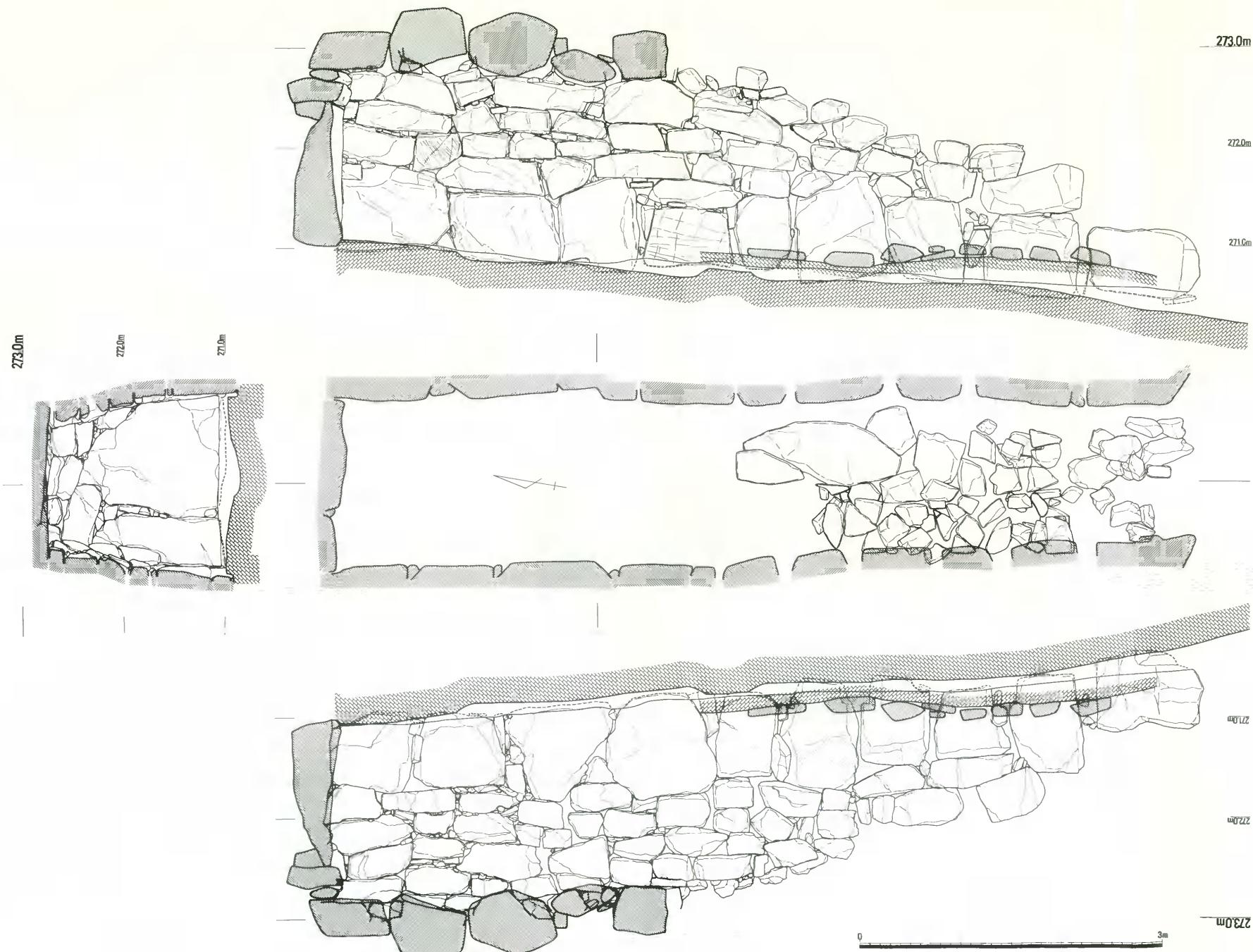
## 堀り方 (第13図)

石室の堀り方は、平面が倒卵形を呈し、最大幅6.6mになる。この地点は、奥壁から概ね2.1m離れた箇所である。石室の中心地点から肩までは、西側が3.2m、東側が3.4mになり、やや西側に寄る。掘り方の深さは、最深部で肩から96cmになり、断面形態は皿状を呈する。地形が下るため、西側の肩はやや不明瞭である。石室の石材は、堀り方のどちらか一方側に寄せることはない。ただし西側にやや寄っており、西側側壁の構築が直線的に積み上げられるのと関連するのであろう。この堀り方は北側では地山から掘り込まれるが、南側は黒色の造成土から掘り込まれる。造成土の範囲は、石室入り口部から東側で3m、西側で4.8mである。

## 主体部 (第14・15図)

室尾石生谷口古墳の内部主体は、無袖の横穴式石室である。奥壁幅1.7m、全長8.5mで、全長は奥壁幅のちょうど5倍になる。高さは奥壁部分で1.73mを測る。主軸線はN—9°—Wになる。石室の残存度は、天井石が奥壁側から5石残っており、基底部はほぼ全てが残る。

奥壁は3段構築であり、基底部は2石からなる。特に東側は大型で、120×140cmになる。西側はやや小型で、47×125cmを測る。2・3段目は20~30cm×50~70cmの石材を、横に寝かして積み上げる。



第14図 石室実測図 (1/40)

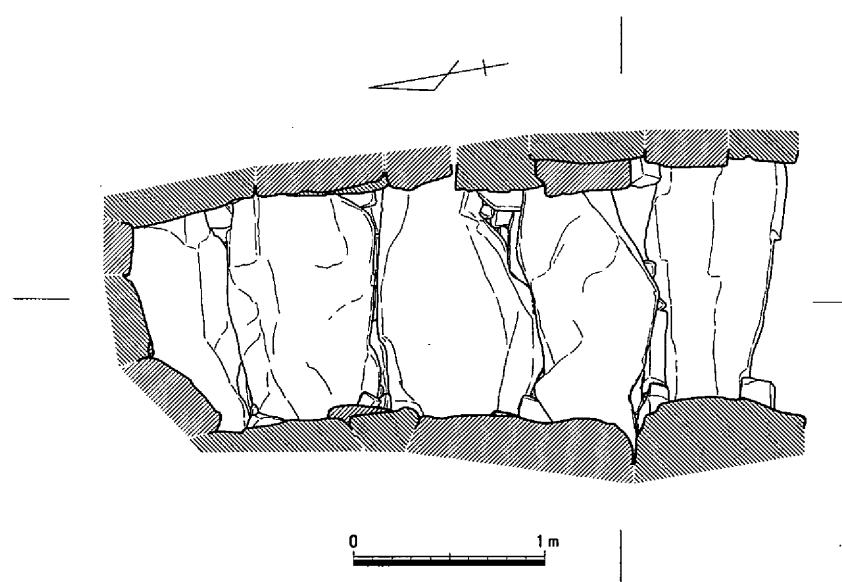
また奥壁基底部は側壁に挟み込まれている。

側壁は東西両側とも、基底部に腰石を使用している。西側で10石、東側で9石を数える。西側の側壁は5段構成で、天井石がなくなる付近から4段になる。基底部の腰石は縦に置かれ、奥壁側から4石目までが横口に、5～9石までは小口に、入口部は横口に置かれる。また6～9石は地中深く埋められる。2段目

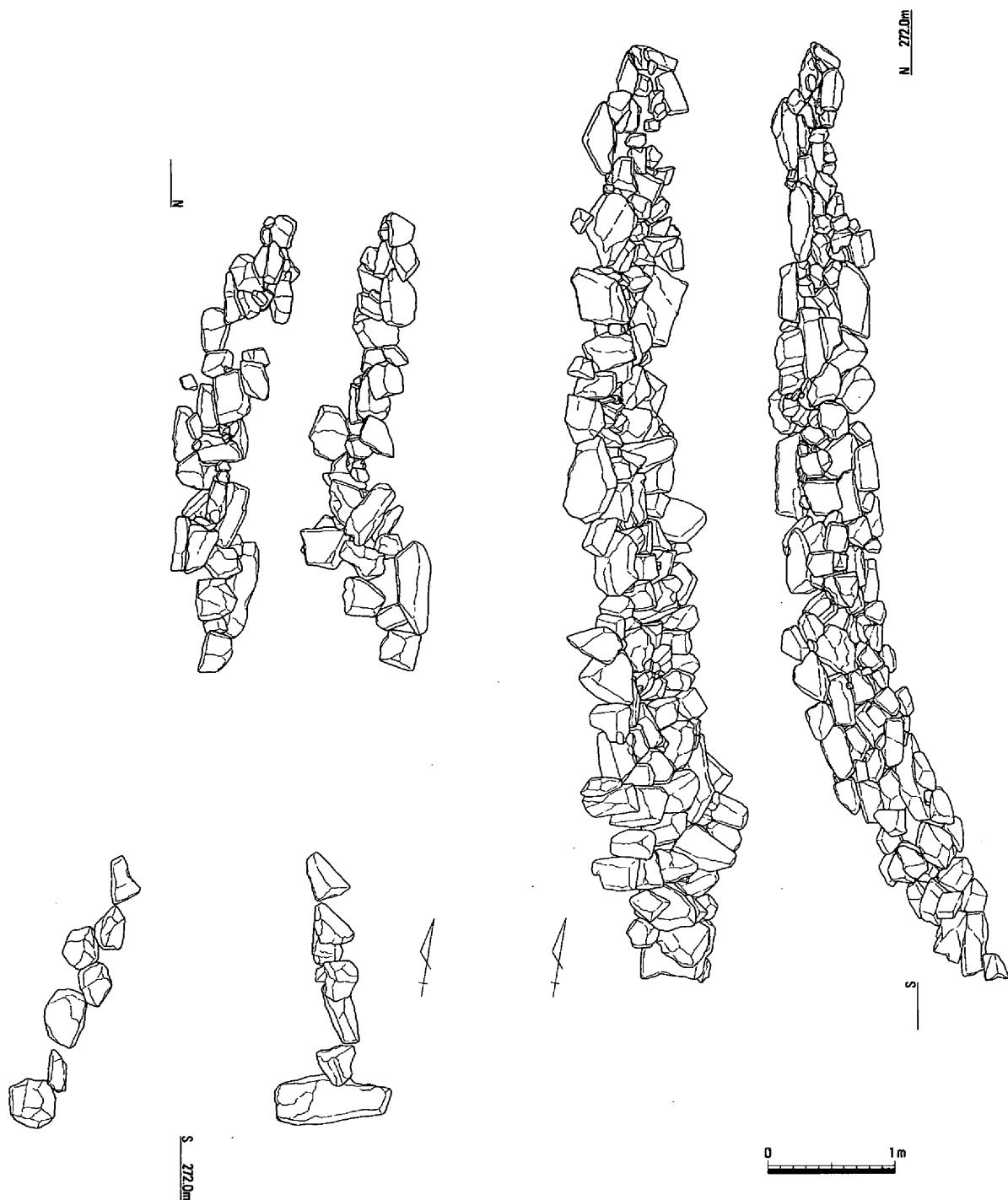
以降は、20～30cm×50～70cm前後の石材を横に寝かして構築する。1～3段目までは奥壁基底部のレベルとほぼ一致し、4・5段目はそれぞれ奥壁の2・3段目と一致する。どの段も目地は、奥壁側から入口部まで多少の補正をしながら一定に走る。なお西側は、基底部から5段目までほぼ直線的に積み上げられ、持ち送りが少ない。東側の側壁は、基本的に4段構成であるが、基底部2・3石付近のみ5段構成になり、天井石がなくなる付近から3段になる。基底部の腰石は縦に置かれ、奥壁側から4石目までが横口に、5～7石までは小口に、8・9石が横口に置かれる。また5～8石までは地中深く埋められる。2段目以降は、20～30cm×50～70cm前後の石材を横に寝かして構築する。1・2段目までは奥壁基底部のレベルとほぼ一致し、3・4段目はそれぞれ奥壁の2・3段目と一致する。どの段も目地はほぼ一定に走る。この東側側壁は、西側の比べて持ち送りが急になり、奥壁に近い2・3段目の石は奥壁の入り込んでいる。石室の石材は、花崗岩と緑色のホルンフェルスの2種類を使用するが、花崗岩の比率の方が圧倒的に多い。どちらの石材も現地産の自然石をそのまま使用しているが、ホルンフェルスの一部に加工の跡が見られるものもある。敷石は、石室入口部から4.5m付近まで存在し、それより奥には存在しない。この敷石が始まる部分は、両側壁とも基底部が横口から小口へ変化し、深く埋められる地点でもある。これらの事実から敷石のある部分を羨道部、それより奥を玄室部として意識していたのかもしれない。なお現存している5石の天井石は、奥壁側から順に置かれるが、4石目が3石目より早く置かれた可能性が強い。

#### 石列（第16図）

断面の項などで先述しているが、石室の両脇には石列がある。この石列は盛土の内側に入ることが確実であり、墳丘完成時には完全に隠れてしまう。石列の規模は、東側で7.4m、西側で7mになる。ただし西側は残存度が悪く、本来は東側と同じ規模になったかもしれない。東側石列はほぼ完全な形で残存しており、主に径30～50cm前後の石材を3～4段程度に積み上げる。石材を規則的に並べたり、面を揃えるということはない。ただし最上段には、径50～70cm前後の大きめの石材を使用している。石列は南側に向かうと斜面に合わせる形で下っており、斜面の上がる北側では細くなる。西側石列は、北側の上部と南側の基底部を抜かした全てが失われる。そのため本来の形状は不明だが、残存部分

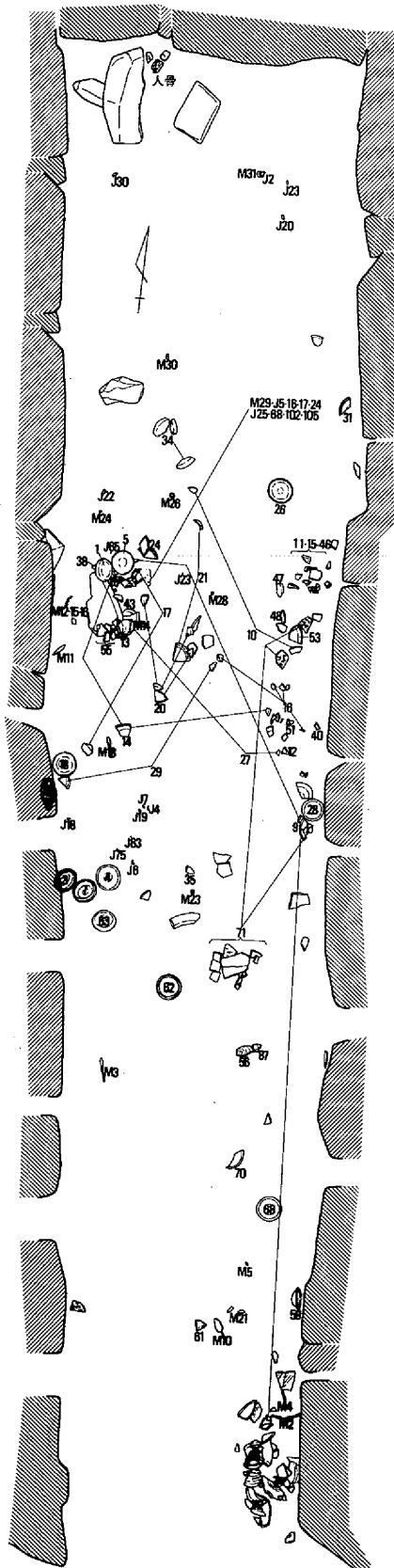


第15図 石室天井石見上げ図 (1/40)

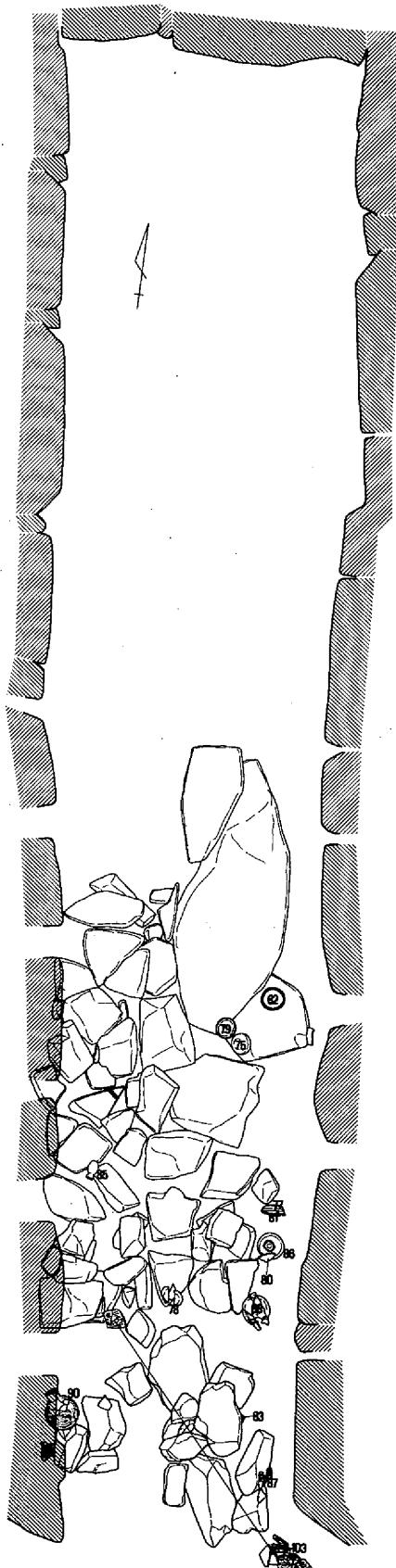


第16図 石列平断面図 (1/50)

の観察からは、東側石列ほど石材の積み方が密ではない。本来的にも、東側の方が整然としていた可能性が高い。また北壁断面図に石列になるかもしれない礫群があり、北側にも石列が存在した可能性がある。これらの石列は、断面図などで石室構築の最終段階に築かれたことが判明した。おそらく石室及び裏込めを保護するための施設であり、石室石材の持ち送りが急な東側を厳重に構築したものと思われる。石列に使用された石材は、石室に使用されたものと同じで、花崗岩とホルンフェルスの2種類である。この様な墳丘内に埋まる石列は、岡山県内や近県で数例報告されているが、大半は保存度が悪く、性格などが判明した例は少ない。



第17図 石室内遺物出土状況 1  
(1/40)



## 第18図 石室内遺物出土状況 2 (1/40)

遺物出土狀況

(第17・18図)

古墳の石室内からは、須恵器を始め鉄製品や玉類などの副葬品が多数出土する。これらの副葬品は、出土地点別に時期差や器種構成などに多少の差違が見られる。特に石室奥側と敷石の上下の3箇所では、違いが現れる。

石室奥側は、  
奥壁に近い付近  
に人骨があり、  
耳環や玉類が出  
土するが、全体  
的に副葬品は多  
く存在しない。  
奥壁から2m程  
度離れた地点以  
降から、多量の  
副葬品が出土し  
始める。この内  
須恵器では、杯  
類が圧倒的多い。  
杯蓋の中には口  
径が15cmを越え  
るものがあり、  
これは田辺編年  
でTK43段階の  
新相になる。こ  
れらは比較的の

側に位置し、大半が破片で出土する。また杯蓋の口径が13cm・杯身の口径が12cm前後になるTK209の古相のものも、大半が破片で出土する。破片の内でも接合関係があるものは、大半が石室奥側内で収まり、一部のものが敷石下と接合するが敷石上との接合はない。完形品には1~7・26・28があるが、28を除いてTK209の新相になり、全て敷石寄りから出土する。石室奥側では杯類が50個体前後あるが、杯蓋と杯身の比率はほぼ1:1になる。杯以外では、高杯・直行壺・提瓶などがあるが多くはない。他の遺物では、耳環と玉類、刀子などはほとんど全てが奥側出土であり、馬具なども出土する。

敷石下側の副葬品は、特に東側の側壁付近に出土が集中する。須恵器の内でも杯類は、口径が12~13cmになる蓋や、11~12cmになる身が主流を占める。これらはTK209でも新相になる。杯類の比率は他の器種よりも多いが、石室奥側のように圧倒的な数にはならない。蓋と身の比率も1:1にはならず、身の数の方が多くなる。杯以外では、椀・高杯・広口壺・提瓶・横瓶などがある。また石室内から出土した鉄鏹の全てが、この敷石下から出土する。

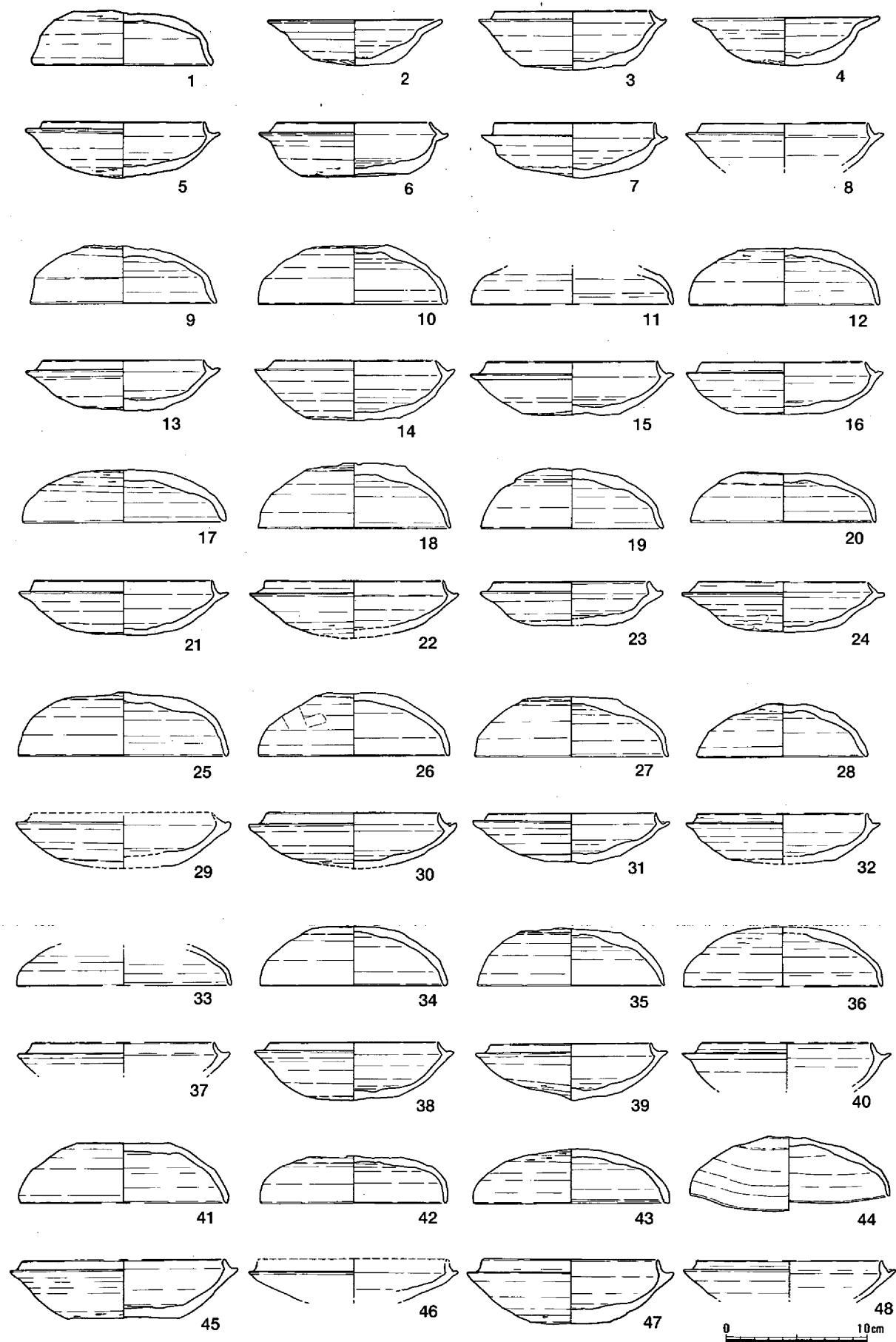
敷石上側の副葬品は、須恵器のみである。この内杯類は、蓋の口径11~12cm・身の口径10~11cmのものが含まれ、これらはTK217になる。77・81は、さらに口径が小さく、TK217より新相になる。両者の比率は、蓋の方が多くなる。杯類以外では、壺・平瓶・醜・提瓶などがあり、平瓶と醜はこの地点のみの出土である。

以上のことからこれら3地点は、古い順に奥側→敷石下→敷石上の流れが想定できる。奥側でも奥壁に近い地点は副葬品の密度が低く、人骨なども出土しており、遺体を安置するスペースであったのだろう。人骨がある西壁寄りと、耳環や玉類の集中する東壁寄りの2箇所の位置が想定できる。また須恵器1・5と3・7・8の間には、160cmほどのスペースがある。このスペースの周りには完形の須恵器が多く、また玉類や刀子なども数多く出土する。これらの状況からこのスペースに埋葬が行われたことは確実であろう。スペースの周りにある完形土器はTK209の新相であり、奥側内にあるこれより古層の土器はこのスペースを確保するために避けられたと考えられ、ゆえに破片で出土すると思われる。また敷石はこのスペースを避けるように敷かれており、敷石の設置時期がこのスペースと同じか、遅い場合でも意識的の避けて敷かれたものと思われる。

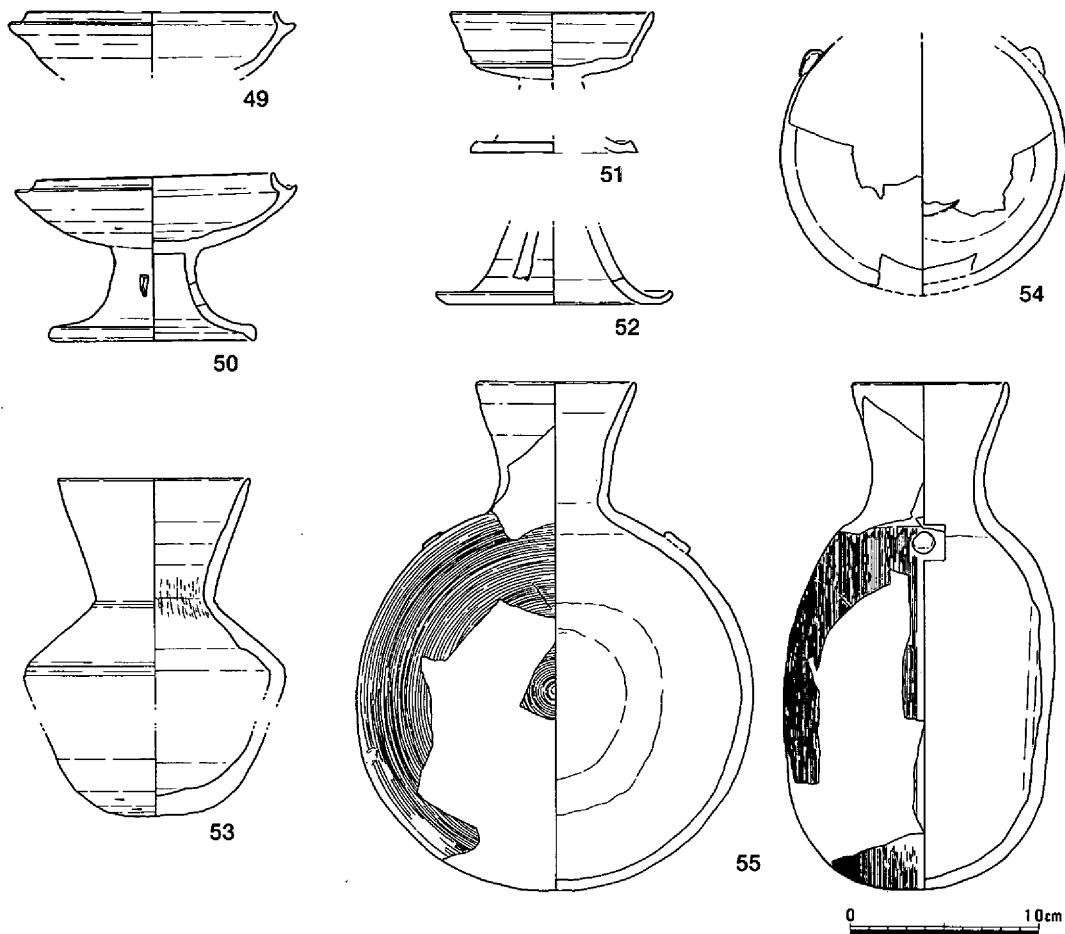
#### ◎出土遺物

##### 須恵器<奥側>（第19・20図）

ここで取り扱う須恵器は、敷石の敷かれた箇所より奥側のものを一括して取り扱う。1と5は、出土状態からセットになることが確実な杯蓋と杯身である。1の杯蓋は、口径12.8cm、器高3.8cmで、外面天井部は左回りのヘラケズリである。5の杯身は、口径11.4cm、最大径13.9cm、器高4cmで、外面底部は右回転で左方向のヘラケズリである。2・6と3・4・7は杯身で、それぞれ近いところから出土する。2・4は、口縁部が外側に大きく外反するタイプである。2は口径12.4cm、器高3.2cmで、4は口径13.2cm、器高3.4cmになる。両者とも外面底部は、ヘラ切り後未調整である。3・6・7は口径が11cm前後、最大径が13cm台、器高が4cm前後になる。6がやや大きく、外面底部のヘラケズリが上方まで来るが、3者ともヘラ切り後未調整である。上記のもの以外は出土地点と法量の近いものを並べたもので、セット関係になるかは不明である。しかし杯蓋と杯身の数的比率は、ほぼ1:1になる。9~12・17~20・25~28・33~36・41~44は杯蓋になる。口径は、25・33・41が15cm台、17・36・43・44が14cm台、28が12cm台で、他は全て13cm台になる。外面天井部は、口径14cm台になる17・43がヘラケズリ(左)になる以外、全てヘラ切り後未調整である。13~16・21~24・29~32・37~40・45~49は杯



第19図 石室奥側出土遺物1 <須恵器> (1/4)

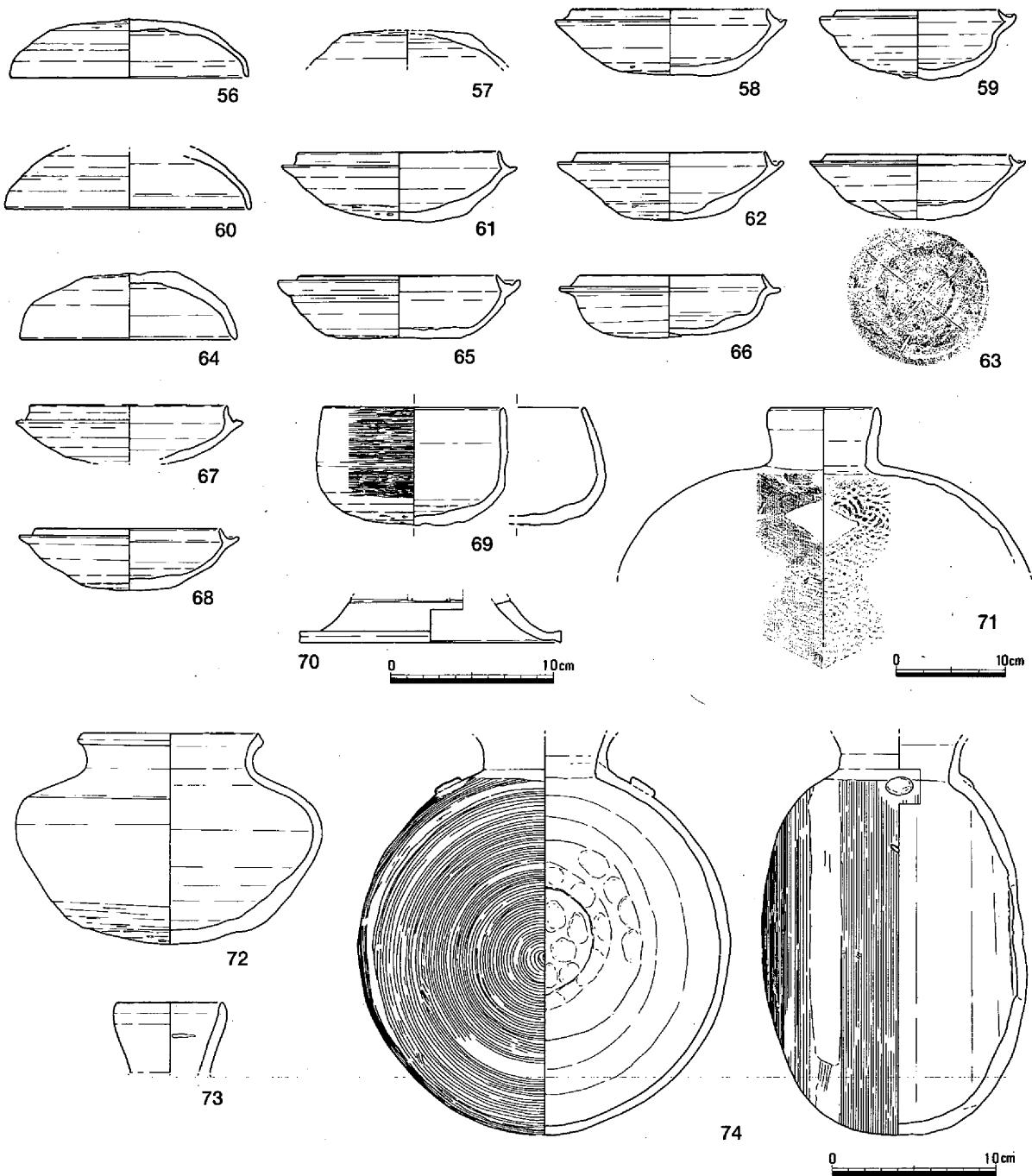


第20図 石室奥側出土遺物2&lt;須恵器&gt; (1/4)

身である。口径は、45が14cm台、37・47が13cm台、23が11cm前後、他は全て12cm後半から13cm前半になる。外面底部は、22・30・39・45がヘラケズリになる以外、すべてヘラ切り後未調整である。50～52は、高杯である。50は普通の杯身に短めの脚が付くタイプで、51・52は小型の杯に長脚が付くタイプであろう。50には、透かし孔が3孔あり、52には長方形のものが付く。53は直行壺である。口縁部は逆ハ字に立ち上がり、外面底部はヘラケズリである。54・55は提瓶である。54は最大径15.2cmになり、55は20.8cmになる。55は外面調整カキメとヘラケズリで、54はロクロナデである。両者とも肩部にボタン状の装飾が付くが、55の方がより簡略化している。

## &lt;敷石下&gt; (第21図)

敷石を取り除き、下から出土したものを一括した。56・57・60・64は杯蓋である。56・60は口径が14cm台となり、64は13cm台となる。外面天井部は、56が左回りのヘラケズリ、60・64がヘラ切り後未調整である。57の焼成は不良で、生焼けに近い。58・59・61～63・65～68は杯身である。口径は59が10cm台になるほかは、11cm～12cm前半に収まる。外面底部は、61・62・67が左回りのヘラケズリ（61の回転は右）で、ほかは全てヘラ切り後未調整である。口縁部形態は、59・62・63・65・68などで口縁部と受部の高低差が縮まる。66は受部が横の拡張する。また63の底部には「X」のヘラ描文がある。69は椀である。全体的に歪んでいるため確実ではないが、口径は概ね11.3cm、器高7.2cmになる。外面には細いカキメがあり、底部はヘラ切り後未調整である。70は高杯の脚である。脚端部はわずかであるが上下に拡張する。方形の透かし孔が付く。71は横瓶である。口径は9.6cmで、胴部最大径は

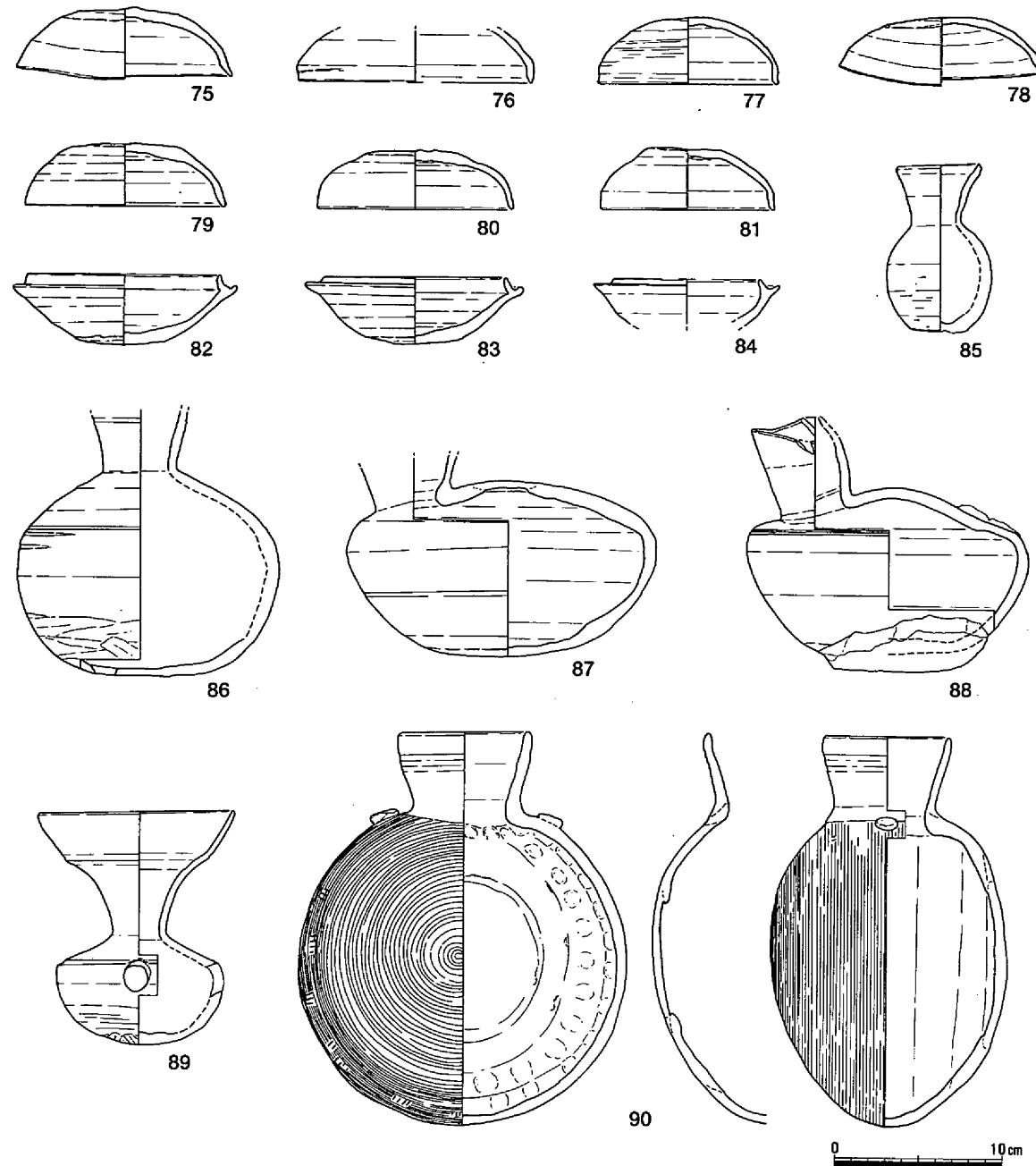


第21図 敷石下出土遺物&lt;須恵器&gt; (1/4・1/6)

概ね38cmになる。外面調整は横タタキ後縦カキメである。内面は當て具痕跡を消さずに残す。72は広口壺である。口径11.4cm、最大径18.8cm、器高12.9cmを測る。口縁部はやや外反し、端部が肥厚する。外面底部の調整は左回りのヘラケズリである。内外両面に緑釉がある。74は提瓶であり、73は提瓶か平瓶の口縁部である。74の胴部最大径は22.7cmを測り、外面調整は両面ともカキメである。肩部にはボタン状装飾が付く。また底部には杯の重ね焼き跡が残り、13.5cmを測る。

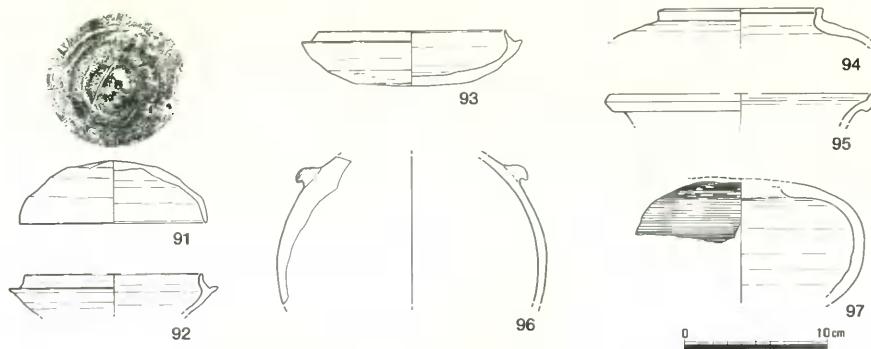
## &lt;敷石上&gt; (第22図)

敷石の上面から出土したものを一括して取り扱う。75~81は杯蓋である。口径は76が13.7cm、75が12.7cm、78~80が11cm後半から12cm前半、77~81が10cm台になる。外面天井部の調整は、78が左回



第22図 敷石上出土遺物<須恵器> (1/4)

りのヘラケズリで、他は全てヘラ切り後未調整である。82~84は杯身である。82・83は口径10cm後半から11cm前半になる。84は8.2cmとなり、口縁部と受部の高低差がほとんどなくなる。外面底部の調整はヘラ切り後未調整である。85は小型の壺である。口縁部は逆ハ字に立ち上がり、端部をやや内側につまみ上げる。口径5cm、器高10.1cmである。86は直行壺である。胴部最大径は15.2cmを測り、頸部は窄まる。底部に焼成後穿孔がある。87・88は平瓶である。87の最大径は18.3cmで、焼成不良である。88の最大径は16.8cmで、形が歪む。底部には他の破片が付着する。また緑釉の流れが下から上へ流れ、天井部に砂粒の付着があることから、伏せて焼かれた可能性が強い。89は甌である。口径11.6cm、器高14cmになり、口径が胴部最大径をわずかにしのぐ。90は提瓶である。胴部最大径は19.2cmであり、ボタン状装飾が付く。外面調整は、カキメとヘラケズリである。



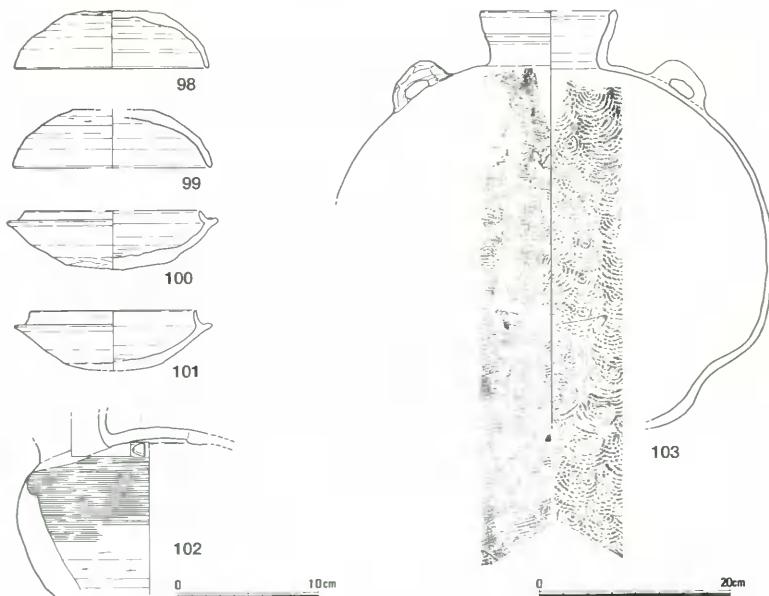
第23図 石室覆土内出土遺物&lt;須恵器&gt; (1/4)

## &lt;石室内覆土&gt; (第23図)

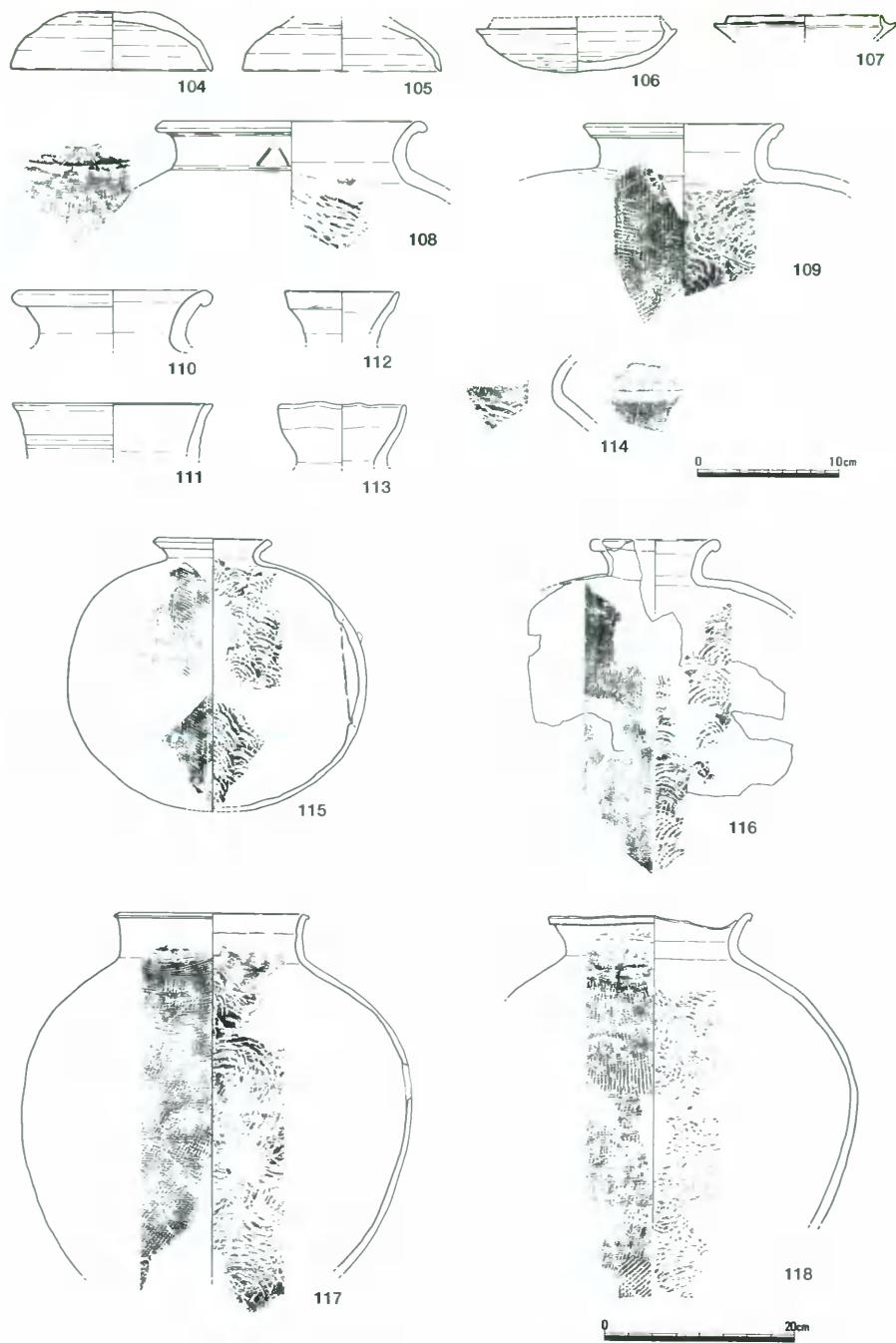
91は杯蓋で、92・93は杯身である。91は口径13.1cmで、天井部にヘラ描きの跡がある。92・93は口径12cm後半～13cm前半に入る。94は短頸壺の口縁部である。口径は11cmを測る。95は甕の口縁部である。口径18.4cmを測る。96は提瓶である。胴部最大径が18.8cmになり、鈎状の把手が付く。97は平瓶になるとと思われるが、提瓶の可能性もある。外面調整はカキメである。

## &lt;石室入口部&gt; (第24図)

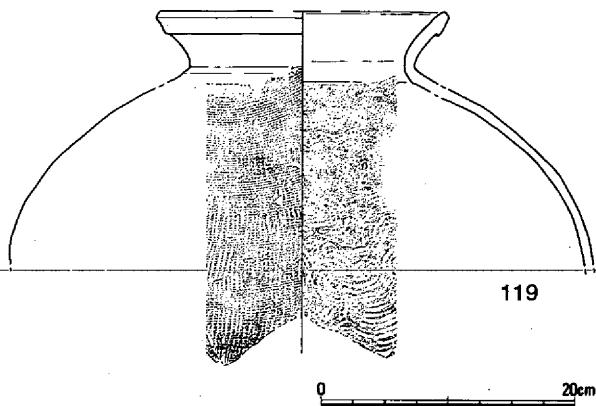
98・99は杯蓋で、口径が14cm前後になる。100・101は杯身で、口径が11cm後半～12cm前半になる。102は平瓶で、ボタン状装飾が付く。103は大型の提瓶になる。口径は14.1cm、胴部最大径は46cm前後になるであろう。肩部に大型の耳を有する。外面調整は横タタキ後縦カキメである。



第24図 石室入口部出土遺物&lt;須恵器&gt; (1/4・1/6)



第25図 墳丘盛土内出土遺物1 <須恵器> (1/4・1/6)

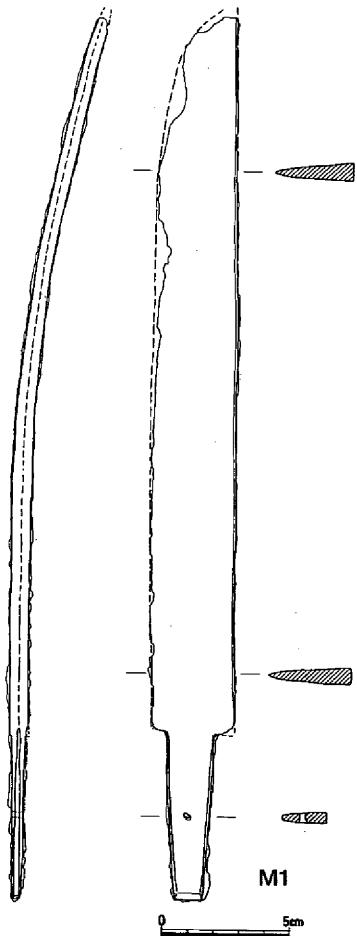


第26図 墳丘盛土内出土遺物2 &lt;須恵器&gt; (1/6)

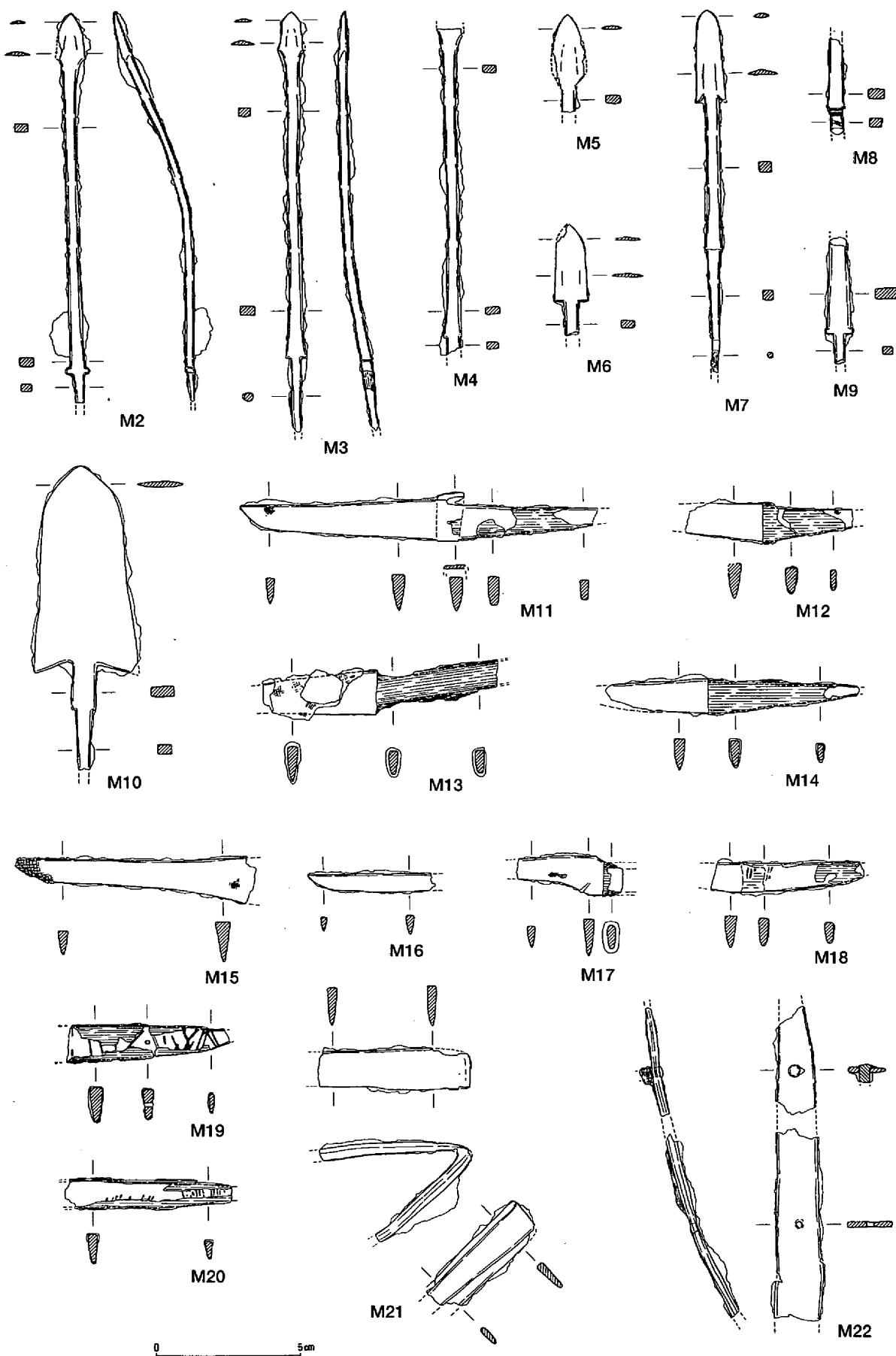
112と113は提瓶か平瓶の口縁部になる。114は横瓶の頸部になる。焼成不良である。115・116は横瓶である。115の胴部最大径は31.2cmで、球形に近い形態である。外面調整は、斜めタタキ後縦カキメである。外面に重ね焼きの跡が残る。116の外面調整は、横と斜めのタタキ後縦カキメである。焼成は不良である。117～119は甕である。3者とも外面調整タタキ後縦カキメを施す。内面調整は、当て具痕跡を117・118は消さず、119は消す。口縁部形態は、117が垂直に立ち上がり、端部が外方に拡張する。118・119は逆ハ字になる。また117には胴部に焼成後穿孔がある。

#### 鉄製品 (第27・28図)

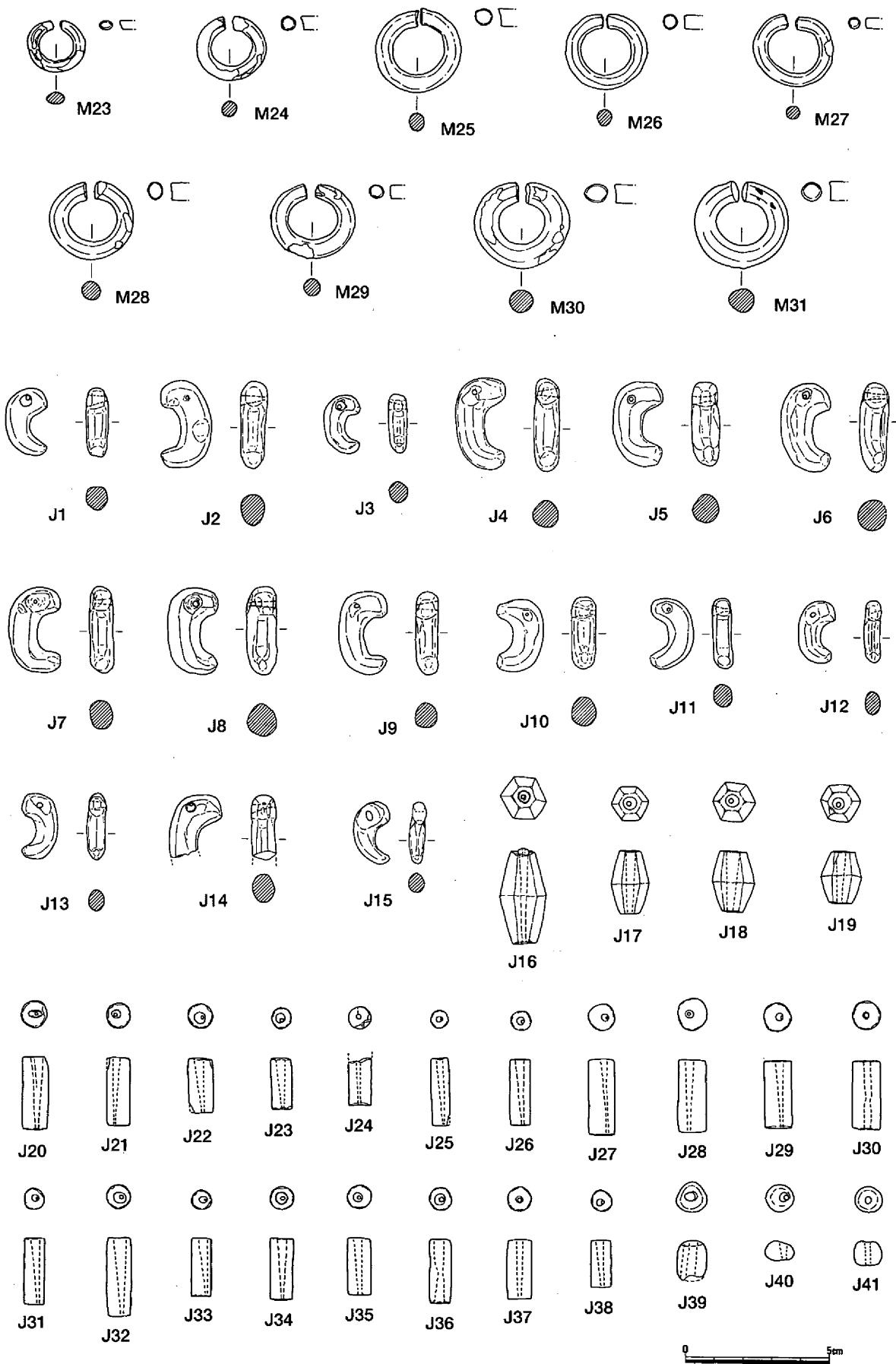
M1は、刀である。茎長は6.6cmになるが、刀身長は欠損のため不明である。茎尻は方形になり、茎部に目釘穴が一ヵ所ある。M2～M10は鎌である。全てが敷石下から出土する。M2～M9は長頸式であり、M10が平根式である。長頸式の中でもM2～M5までは柳葉式で、M2・3・5の鎌身部には鎬がある。M2の関部には棘状突起が存在し、M3・4の関部は方形で、外方へやや広がる。M2・3は共に頸部が折れ曲がる。M3の茎部には木質が残る。M6は長三角形式である。鎌身部には鎬がある。M7は腸抉柳葉式である。鎌身部は3.2cmとやや大きめで、鎬がある。関部は方形で、外方へやや広がる。M8・M9は、鎌身部が欠損しているため、型式は不明である。関部はM9に棘状突起があり、M8にはない。なおM8には糸巻き痕の跡が残る。M10は、平根式でも腸抉柳葉式の逆刺部が簡略化したものである。M11～21は、刀子である。M21以外全てが石室奥側から出土する。M11には鎌が残存する。刀身長は7.2cmであるが、茎部は欠損する。関部の形態は、M12・17が背部のみに、M13が両側に段を有する。M14・18は関部を形成しない。M11・13・15・17の刀身部には布地が残る。M11・12・13・14・17・18・19・20の茎部には木質が残り、M18～20には糸巻き痕も残る。M21は敷石下から出土し、関部付近で折れ曲がる。M22は、馬具であり、木心鉄板張壺鑑の帶金部である。石室奥側からの出土である。1列に笠鎌が打たれる。鎌付近には縦目の木質が残る。



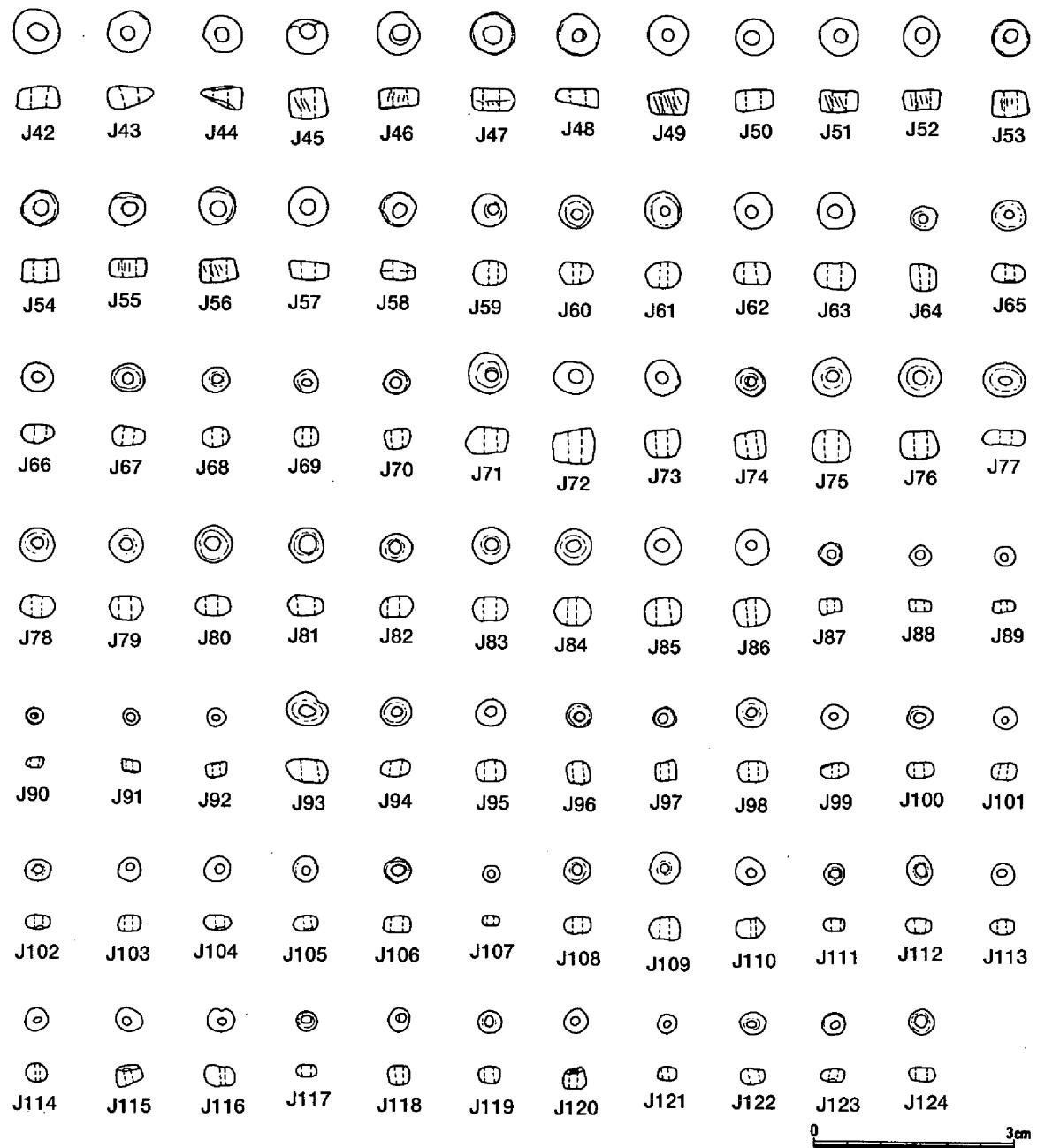
第27図 鉄刀 (1/3)



第28図 石室内出土遺物<鉄製品> (1/2)



第29図 石室内出土遺物&lt;耳環・玉類1&gt; (1/2)



第30図 石室内出土遺物&lt;玉類2&gt; (1/1)

## 耳環 (第29図)

耳環は9点出土し、M23が敷石下から出土する以外、全て石室奥側から出土する。この内出土状態と法量から、M26—M27、M28—M29、M30—M31がセットになると思われる。M23・24・25にはセットが見られず、本来は12点存在したのかもしれない。M26—M27は概ね外径25×28mm・内径15×18mm・断面5mmのセットで、M28—M29は外径25×29mm・内径15×17mm・断面6mmのセット、M30—31は外径30×32mm・内径15×17mm・断面9mmのセットになる。材質はM25を除いた全てが本来は金銅製で、現在金が剥離しているが、M31にのみわずかに残存する。M25は鉛製で白色を呈する。

## 玉類 (第29・30図)

玉類の出土総数は125点で、勾玉15、切子玉4、管玉19、棗玉1、丸玉2、臼玉17、小玉67である。

この内出土地点の把握できるものは、全て石室奥側から出土する。J1～J15は勾玉である。J1は水晶、J2・3は碧玉、J4～J14は瑪瑙、J15は滑石である。水晶と滑石のJ1・J15は小さく、それぞれ、長さ24mm・径7.5mm、長さ21.5mm・径7mmである。最も大きくなるものは瑪瑙製のJ6になり、長さ30.5mm・径11mmであるが、碧玉製と瑪瑙製のものはほとんど法量が等しい。孔の穿孔は全て片面穿孔であるが、瑪瑙製のJ5～8・12は、穿孔を入れる逆側に抉りを入れている。J16～19は水晶製の切子玉である。J16が最も大型になり、長さ32mm・径15.7mmになる。穿孔部に小玉J125が入り込む。J20～38は管玉であり、J25・26が緑色凝灰岩になる他は、全て碧玉製である。孔の穿孔方法は大半が片面穿孔になるが、J30・36のみ両面穿孔になる。J39は秦玉で、琥珀製である。J40・41は、丸玉である。J40が水晶製で、J41はガラス製で群青色である。J42～58は白玉で、全てが滑石製で片面穿孔である。J59～125はガラス製の小玉である。色調は、群青・青・水色・緑・黄緑・くすんだ水色・赤・黒などがある。

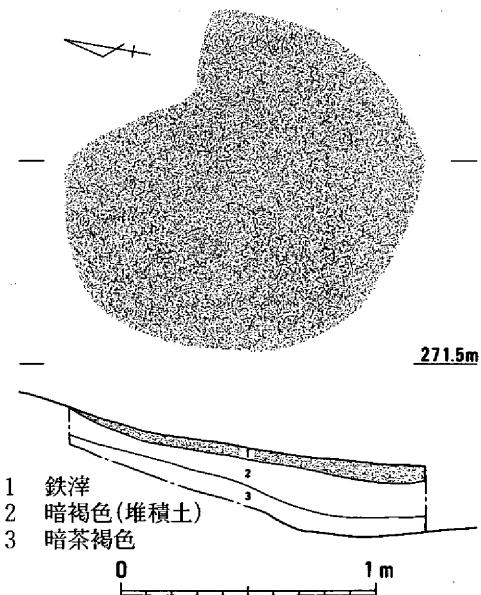
#### 人骨（図版8-3）

石室内の奥壁の際に、人骨の破片が数点出土する。出土する人骨のほとんどは頭蓋骨で、後頭骨・側頭骨・頭頂骨付近である。他に四肢骨が1点のみ出土する。これらは1体分になると思われ、性別の認識は不可能であるが、壮年の成人と思われる。

出土遺物の中でも須恵器は、TK43～TK217の幅がある。他の出土遺物などからも判断して、室尾石生谷口古墳が築造されたのは6世紀第4四半期で、7世紀第1四半期頃までに複数の追葬が行われたと判断される。  
(小林)

### 第3節 鉄滓散布地の調査

鉄滓は、古墳の東側に広く散布する。この中で古墳の東端から東へ2.4m地点に、集積地が1カ所存在する。集積地の範囲は、1.38×1.29mで、深さは6cm前後になる。集積地の下には、特に下部構造はなく、断面図では2層が暗褐色の堆積土で、3層が地山になる。つまりこれらの鉄滓は何らかの遺構に伴うわけではなく、この地点に単に集められたものと判断できる。時期は近世のものと思われる。調査区内で確認された集積地はこの1つで、他の集積地や、製鉄遺構などは検出されなかった。この集積地採集の鉄滓は、分析の結果、ウルボスピネスが検出され、成分中に二酸化チタン3.66%・バナジウム0.20%・酸化マンガン0.49%が含まれる。これらは砂鉄特有成分であり、この集積地の鉄滓は砂鉄製練滓に分類できる。また製鉄原料である砂鉄は、真砂（酸性砂鉄）である。鉄滓は古墳の石室の中から出土するものもあるが、分析の結果、やはりウルボスピルスが検出され、二酸化チタン・バナジウム・酸化マンガンの成分量もほぼこの集積地の鉄滓と同じ量になる。おそらく散布している鉄滓が後世の段階で石室に入り込んだと思われ、石室内は数回の搅乱を受けていたと判断される。  
(小林)



第31図 鉄滓集積地平面図（1/30）

## 第4章 まとめ

室尾石生谷口古墳は加茂川と青柳川の合流する地理的に重要な地点にあり、一次調査の結果、他の古墳と群集することなく1基単独で存在することがわかった。全面調査により、無袖型の横穴式石室を内部主体にする、全長14.3mの円墳であることが判明した。石室は奥壁幅1.7m×全長8.5mの規模になり、石室内には敷石が敷かれている場所が存在した。また敷石のない石室奥側と敷石の上下では時期差があることも判明した。石室奥側では3箇所の埋葬地を想定したが、耳環の数は9個体6種類存在し、他にも埋葬主体が存在したであろう。副葬品から考えて埋葬時期は、6世紀第4四半期から7世紀第1四半期まである。古墳自体は自然地形を利用し、標高の低い方を石室の入口側にし、高い方は周溝によって区画している。また入口側のみ葺石状の施設で飾り、見栄えをよくしている。盛土の内側には石室保護のための石列が存在し、他に類を見ないほど整然としている。本古墳のように盛土の内側に石列をもつ古墳は、県内でいくつか知られている。これについて考察をしたい。

### 墳丘内部の石列

墳丘内部に石列を持つ古墳は、県内でいくつか例がある。新見市横見1号墳、哲西町道上古墳、勝央町勝央中核工業団地No10号墳、勝央町畠ノ平2号墳、岡山市根岸古墳、八束村水別2号墳などである。また近県の例では、兵庫県箕谷3号墳などもそうである。

横見1号墳（註1）は、石室の両サイドと後ろ側に石列がある。この石列は石室からやや離れたところにあり、1・2段で構成される。石列は墳丘に対して平行し、石室の主軸とはかみ合わない。調査者は、墳丘を盛り上げるための土留めと考えている。哲西町道上古墳（註2）は、石室の両サイドと後ろ側に石列がある。この石列は1・2段で構成され、西側では石室と離れ、東側では石室と近い位置にある。また石列は、後ろ側では墳丘に対して平行し、石室の両サイドでは石室に平行する。勝央中核工業団地No10号墳（註3）は、石室の東側のみに石列がある。この石列は石室よりやや離れた所にあり、2段構成である。石列は石室に対して平行する。畠ノ平2号墳（註4）は、石室入口部側のみを半周する形で石列が存在する。この石列は1段構成で、墳丘に対して平行に置かれる。石列は地山の直上に置かれる。根岸古墳（註5）は、南側側壁のすぐ脇に存在する。この石列は1・2段で構成され、側壁に直行し堀方の中に入り込む。調査者は、石室構築時の崩土防止の機能を考える。水別2号墳（註6）は、石室の両脇に近接して存在する。この石列は1段で構成され、石室に平行する形である。調査者は、石室周辺の土砂の流失を防ぐ機能を考える。箕谷古墳（註7）は、外護列石に平行して2列の石列が存在する。この石列は3・4段で構成され、墳丘に平行して築かれるため楕円形を呈している。最も石室よりの石列は、ちょうど石室裏込めの位置と重なる。また石室側壁の持ち送りが急な西側は、特に厳重に作られている。調査者は石室保護の機能を考える。

これらの石列が、それぞれが一律の性格であったかを判断するのは困難である。本古墳のように石列が石室に平行するタイプは、道上古墳・勝央中核工業団地No10号墳・水別2号墳などがあるが、上記の2者は、石室から離れた位置にある。水別2号墳は、本古墳のように石列が石室のすぐ脇にあり、本古墳と同じ機能を有していたものと思われる。また箕谷3号墳は形状こそ一致しないが、側壁の持ち送りが急な側を厳重に作るなど、その性格は同じものであろう。本古墳のように石列に多量の石材を使えたのは、石生谷という名前にもあるように、近隣には材料たる石材が無数に転がっているとい

う状況にもよろう。続いて石室に使用された石材について考察する。

#### 使用石材（第32図）

本古墳では石室・敷石・石列・葺石部で石材が使用されるが、全ての場所で現地産の花崗岩とホルンフェルスが使用される。ホルンフェルスは花崗岩に比べて重量が重い割に硬度が弱い。そのため石室の石材としては花崗岩の方が適していたらしく、その割合は東壁で94%、西壁で91%に及ぶ。また天井石も全てが花崗岩であり、奥壁も大半が花崗岩である。それに比べて敷石・石列・葺石部など大型石を使用する必要のない箇所では、ホルンフェルスの割合が増す。その割合は概ね16~17%前後で、これは周辺に散らばる自然石の割合と同じである。これらの箇所では特に石材を意識せず、周辺に散らばる石材を無

規則に並べたも

のと思われる。

石室内部の石材

では、ホルンフ

エルスを腰石に

使用する例もあ

り、また石室石

材間に詰め

る石材にもかな

り多くホルンフ

エルスが含まれ

る。つまり石室

における花崗岩

の比率は、石室

石材における適

正のためと思わ

れ、特別な意味

がある訳ではな

いだろう。ただ

し西壁は、玄室

と羨道を意識し

たと思われる箇所

付近にホルンフ

エルスが集中し

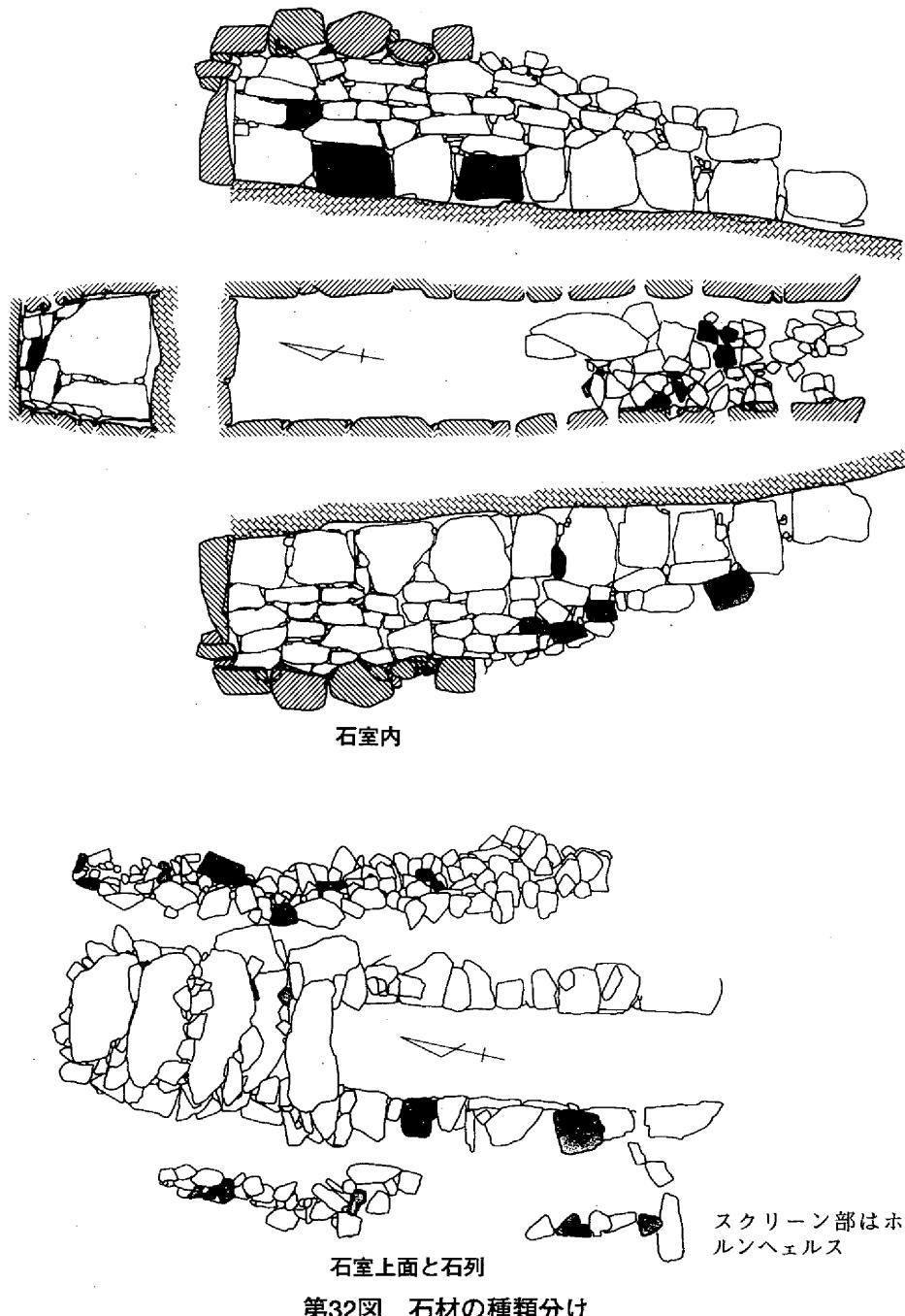
ており、ここに

関しては意識し

て石材選定が行

われたものと思

われる。

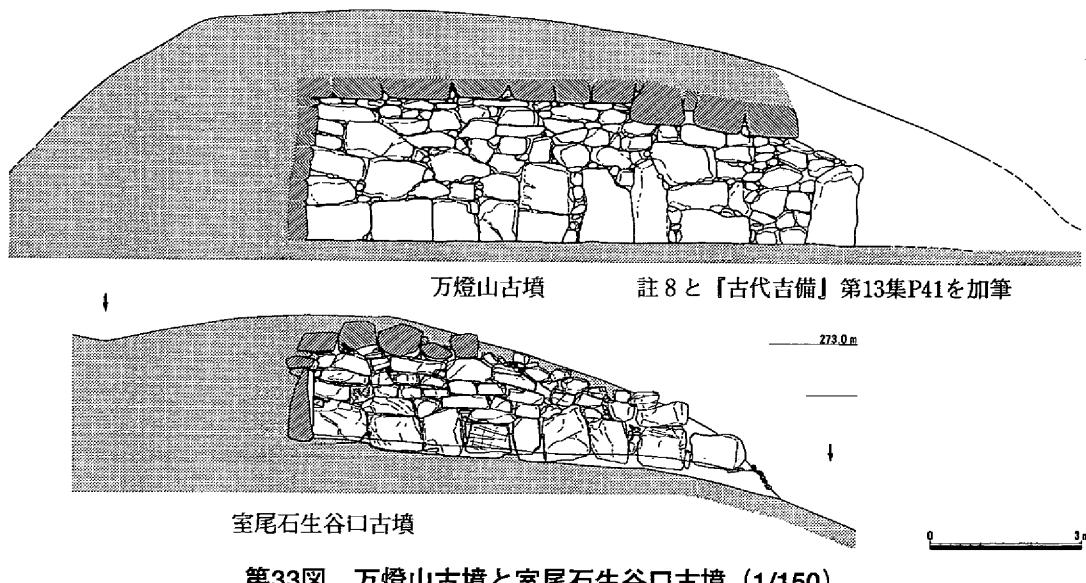


### 万燈山古墳との比較

加茂町内には室尾石生谷口古墳のほかに、かつて万燈山古墳（註8）の調査が行われている。万燈山古墳は加茂町のみならず、古墳時代後期における美作地区最大級の古墳であり、多量の副葬品が出土している。その全長は24m前後で、円墳になり、奥壁幅2.1m×全長11m前後の横穴式石室を内部主体とする。本古墳は全長14.3mで、横穴式石室が奥壁幅1.7m×全長8.5mになり、万燈山古墳の方が一回り以上大きくなる。これらの差違は副葬品に関しても見受けらる。耳環の数は万燈山21：本古墳9、鉄刀は万燈山9：本古墳1、鉄鎌は万燈山15前後：本古墳7～9、刀子は万燈山14：本古墳11、になりすべてにおいて万燈山古墳の方が多くなる。玉類は本古墳からも多数出土しており、数においては互角になるが、万燈山古墳の方が精練感がある。また本古墳では出土しなかった空玉なども出土している。馬具は、本古墳からは鏡のみの出土であるが、万燈山からは金銅張りの雲珠や、轡・辻金具・馬鈴などが出土している。土器は本古墳が須恵器のみの出土であるのに対し、万燈山では須恵器と土師器の2種類が出土する。須恵器を器種別に見ると、高杯は万燈山5：本古墳4、提瓶は万燈山7：本古墳4以上、平瓶は万燈山3：本古墳3以上とやや万燈山古墳の方が抜きである。ただし杯類は万燈山40前後に対し、本古墳では80前後あり、径の復元できなかった破片がさらに30前後を数え、圧倒する。質の万燈山古墳に対し、数で対抗した形である。

続いて構築年代を須恵器から考察したい。本古墳出土の須恵器はTK43～TK217まであり、わずかではあるがさらに新相のものも含まれる。万燈山古墳も最も古相の時期は、杯類の径が15cm前後になるTK43である。TK43となる須恵器は破片が多く、この状況は本古墳と類似する。完形のものや数が最も増えるのは、杯類の径が13cm前後になるTK209になる。またTK217の時期にも高い比率で須恵器が存在する。ただしTK217以降のものは存在しないように思える。つまり万燈山古墳と本古墳は、6世紀第4四半期にほぼ同時に構築され、常に万燈山古墳が一步リードする形で7世紀第1四半期を経てるが、本古墳の方がやや長くまで追葬が行われていたことになる。

これらの須恵器の技法や胎土などを比較してみたい。万燈山古墳の場合、古相の杯類の底部や天井部は、ヘラケズリによる調整である。TK209以降はほとんど全ての個体がヘラ切り後未調整のまま終わる。これらの特徴は本古墳と全く同じである。胎土などもほとんど同じである。特に両古墳の胎土



第33図 万燈山古墳と室尾石生谷口古墳 (1/150)

中には、径1mm前後の黒色粒子が含まれており、同一の箇所から原材料をとったと言つてよい。原材料のみでなく、同一の窯跡で焼かれたものであると言えるだろう。また万燈山古墳には、本古墳出土の2・4のような口縁部が外側に大きく開く杯身も存在し、これは当地域の地域性といつてよいだろう。

万燈山古墳との比較で、室尾石生谷口古墳が劣っているような印象を受けるかもしれないが、比較の対象が当時期における美作地区最大級の古墳であつただけであつて、本古墳の評価が下がるものではない。むしろ当時期美作地区最大級の古墳から1.5kmほどしか離れていない場所に、同時期に並行してそれに次ぐ古墳を築けたことは評価できる。先述したが古墳のある位置は、加茂川と青柳川との合流地点であり、津山方面から鳥取県側へ抜ける交通の要衝に位置する。古墳の被葬者たちは、この交通の要衝を支配したもの達であったといえる。

(小林)

## 註

- 註1 岡田博ほか「横見墳墓群と横見古墳群の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 岡山県教育委員会 1977年
- 註2 岡本寛久「道上遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』23 岡山県教育委員会 1978年
- 註3 山磨康平ほか「勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」岡山県勝央町教育委員会 1976年
- 註4 弘田和司「畠ノ平古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 岡山県教育委員会 1996年
- 註5 岡本寛久「根岸古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』123 岡山県教育委員会 1998年
- 註6 金田善敬ほか「水別古墳群・水別遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』131 岡山県教育委員会 1998年
- 註7 谷本進ほか「箕谷古墳群」『兵庫県八鹿町文化財調査報告書』第6集 八鹿町教育委員会 1987年
- 註8 『万燈山古墳』岡山県苦田郡加茂町文化財保護委員会 1973年

## 遺物観察表

第1表 鉄器観察表

\*は推定もしくは現存値

番号	遺構名	器種	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	備考
M1	表採	刀	357	33	7	267	刀身部に屈曲部有り、目釘穴有り
M2	石室敷石下	鎌	*135	10	1.5	8.55	鎌身部に鎬有り、頸部に屈曲部有り
M3	石室敷石下	鎌	*147	10	1.5	8.94	鎌身部に鎬有り、頸部に屈曲部有り
M4	石室敷石下	鎌	*114			5.89	
M5	石室敷石下	鎌		*12.5	1.5	2.67	鎌身部に鎬有り
M6	石室覆土内	鎌		12	1.5	1.90	鎌身部に鎬有り
M7	石室覆土内	鎌	*126	9.5	2	9.94	鎌身部に鎬有り
M8	石室覆土内	鎌				2.75	茎部に糸巻き痕有り
M9	石室覆土内	鎌				3.36	
M10	石室敷石下	鎌	*106	37	2	34.13	
M11	石室奥側	刀子	*125	14	4	16.40	刀身部に布地、茎部に木質有り
M12	石室奥側	刀子		13	4	8.65	茎部に木質有り
M13	石室奥側	刀子		15	3	11.17	刀身部に布地、茎部に木質有り
M14	石室奥側	刀子		12	4	7.63	茎部に木質有り
M15	石室覆土内	刀子		*16	5	10.12	刀身部に布地有り
M16	石室覆土内	刀子?		7	2.5	2.53	
M17	石室覆土内	刀子		14	3.2	3.38	刀身部に布地、茎部に木質有り
M18	石室覆土内	刀子		10	4	5.48	茎部糸巻き後木質
M19	石室覆土内	刀子		11	4	6.68	茎部糸巻き後木質、目釘穴1孔有り
M20	石室覆土内	刀子		9	3	5.93	茎部糸巻き後木質
M21	石室敷石下	刀子		14	3	11.70	茎部に屈曲部有り
M22	石室奥側	馬具(鎧)		16	1.8	14.40	笠鉄1列、鉄の内側に木質有り
M23	石室敷石下	耳環	20	17	5	4.88	
M24	石室奥側	耳環	24	22	5	8.72	
M25	石室奥側	耳環	29	28	6	18.27	鉛製
M26	石室奥側	耳環	28	26	5	8.64	
M27	石室奥側	耳環	27	25	4	7.22	
M28	石室奥側	耳環	29	27	6	14.27	
M29	石室奥側	耳環	29	25	5.5	13.65	
M30	石室奥側	耳環	33	29	8	28.13	
M31	石室奥側	耳環	32	29	8.5	22.87	金張が残る

第2表 玉類観察表

\*は推定もしくは現存値

番号	遺構名	種類	長さmm	径 mm	孔 径 mm	重量 g	材質	色調	備考
J1	石室内覆土	勾玉	24	7.5	右1.5 左3.5	3.31	水晶	透明	片面穿孔
J2	石室奥側	勾玉	30	10	右1.3 左2.9	6.20	碧玉	濃緑	片面穿孔
J3	石室奥側	勾玉	20	7	右1.5 左2	2.07	碧玉	濃緑	片面穿孔
J4	石室奥側	勾玉	31	9.5	右2.8 左1.5	5.99	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔
J5	石室奥側	勾玉	29	10	右2 左3	3.82	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔逆側から抉る
J6	石室奥側	勾玉	30.5	11	右1.2 左2.6	6.42	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔逆側から抉る
J7	石室奥側	勾玉	29	10	右2.2 左1.2	5.31	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔逆側から抉る
J8	石室奥側	勾玉	29.8	10.5	右2.9 左1.7	7.47	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔逆側から抉る
J9	石室内覆土	勾玉	29	8.5	右3.3 左1.2	4.65	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔
J10	石室奥側	勾玉	25	9.7	右1 左3.9	4.71	瑪瑙	琥珀	片面穿孔
J11	石室奥側	勾玉	23.3	8.5	右1 左2.9	3.08	瑪瑙	琥珀	片面穿孔
J12	石室内覆土	勾玉	21.5	7.5	右3.6 左1.4	1.93	瑪瑙	琥珀	片面穿孔逆側から抉る
J13	石室内覆土	勾玉	22.5	7.2	右1.8 左3.5	2.19	瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔
J14	石室奥側	勾玉		9.5	右1.3 左2.4		瑪瑙	淡琥珀	片面穿孔
J15	石室内覆土	勾玉	21.5	7	右1.9 左1.9	1.40	滑石	灰色	
J16	石室奥側	切子玉	32	15.7	上4 下1.3	9.24	水晶	透明	孔部にガラス小玉が入り込む、片面穿孔
J17	石室奥側	切子玉	21.2	12.1	上3.2 下1.2	4.19	水晶	透明	片面穿孔
J18	石室奥側	切子玉	21.5	13.4	上4 下1.2	5.47	水晶	透明	片面穿孔
J19	石室奥側	切子玉	18.5	12.5	上3.3 下1.2	4.16	水晶	透明	片面穿孔
J20	石室奥側	管玉	25.2	9.1	上3.8 下1.1	4.07	碧玉	濃緑	片面穿孔、2回穿つ
J21	石室奥側	管玉	23	8	上2.7 下0.7	2.72	碧玉	濃緑	片面穿孔
J22	石室奥側	管玉	18.8	8.3	上2.5 下1	2.18	碧玉	濃緑	片面穿孔
J23	石室奥側	管玉	17.6	7.2	上2.5 下1	1.65	碧玉	濃緑	片面穿孔
J24	石室奥側	管玉		8.1	下1	1.91	碧玉	濃緑	片面穿孔
J25	石室奥側	管玉	23.7	6.4	上1.5 下1	1.46	緑色凝灰岩	明緑灰	片面穿孔
J26	石室内覆土	管玉	22.5	7.5	上2.2 下0.9	1.88	緑色凝灰岩	明緑灰	片面穿孔
J27	石室内覆土	管玉	26.4	9	上1.9 下0.8	3.89	碧玉	濃緑	片面穿孔
J28	石室内覆土	管玉	24.7	10	上2.5 下1.1	4.62	碧玉	濃緑	片面穿孔
J29	石室内覆土	管玉	23.5	9.5	上2.4 下1.1	4.34	碧玉	濃緑	片面穿孔
J30	石室奥側	管玉	23.8	10.4	上2.2 下2.1	4.56	碧玉	濃緑	片面穿孔
J31	石室内覆土	管玉	23.5	7.0	上2.7 下1.1	2.43	碧玉	濃緑	片面穿孔
J32	石室奥側	管玉	26.9	8	上2.9 下1.1	3.26	碧玉	濃緑	片面穿孔
J33	石室内覆土	管玉	21	7.2	上2.3 下1.1	2.01	碧玉	濃緑	片面穿孔
J34	石室奥側	管玉	21.8	8.4	上4 下1.4	2.81	碧玉	濃緑	片面穿孔
J35	石室内覆土	管玉	19.7	8	上3 下1	2.16	碧玉	濃緑	片面穿孔
J36	石室内覆土	管玉	21.9	7.8	上3.4 下3.2	2.19	碧玉	濃緑	両面穿孔
J37	石室内覆土	管玉	20.5	8.5	上2 下1	2.94	碧玉	濃緑	片面穿孔
J38	石室内覆土	管玉	16	6.8	上2 下0.8	1.29	碧玉	濃緑	片面穿孔
J39	石室内覆土	棗玉	*13.8	1	上4	0.80	琥珀	琥珀	2回穿つ
J40	石室内覆土	丸玉	6.8	9.5	上2.5 下0.9	0.88	水晶	透明	片面穿孔
J41	石室奥側	丸玉	7.7	9.5	2	0.97	ガラス	群青	
J42	石室内覆土	臼玉	3.2	7	上2.5 下2.1	0.24	滑石	黄灰	片面穿孔
J43	石室内覆土	臼玉	3	6.6	上2.2 下2.2	0.16	滑石	灰オリーブ	片面穿孔
J44	石室内覆土	臼玉	3.2	6.4	上2 下2	0.12	滑石	黄灰	片面穿孔
J45	石室内覆土	臼玉	4.4	5.8	上1.8 下1.8	0.20	滑石	灰白	片面穿孔
J46	石室内覆土	臼玉	3.3	6.3	上1.9 下1.9	0.19	滑石	黄灰	片面穿孔
J47	石室内覆土	臼玉	3.4	6.3	上2.2 下2.2	0.24	滑石	黄灰	片面穿孔
J48	石室内覆土	臼玉	2.9	6.4	上1.7 下1.7	0.16	滑石	黄灰	片面穿孔
J49	石室内覆土	臼玉	3.7	6	上1.5 下1.5	0.21	滑石	灰白	片面穿孔
J50	石室内覆土	臼玉	3	5.8	上2.3 下2.3	0.17	滑石	灰白	片面穿孔
J51	石室内覆土	臼玉	3.1	6	上1.9 下1.9	0.18	滑石	灰白	片面穿孔
J52	石室内覆土	臼玉	3.1	5.7	上2.1 下2.1	0.16	滑石	黄灰	片面穿孔
J53	石室内覆土	臼玉	4	5.6	上1.9 下1.9	0.21	滑石	黄灰	片面穿孔
J54	石室内覆土	臼玉	3.4	5.6	上1.9 下1.9	0.17	滑石	灰白	片面穿孔
J55	石室内覆土	臼玉	2.8	5.5	上1.9 下1.9	0.12	滑石	灰白	片面穿孔
J56	石室内覆土	臼玉	3.5	5.8	上2 下2	0.21	滑石	黄灰	片面穿孔
J57	石室内覆土	臼玉	3.1	6	上1.8 下1.8	0.15	滑石	灰白	片面穿孔
J58	石室内覆土	臼玉	2.6	5.4	上1.7 下1.7	0.11	滑石	灰白	片面穿孔
J59	石室内覆土	小玉	3.5	3.7	1	0.13	ガラス	群青	
J60	石室内覆土	小玉	3.3	5	1	0.12	ガラス	群青	
J61	石室内覆土	小玉	4	5.3	1.2	0.16	ガラス	群青	
J62	石室内覆土	小玉	3.3	5.4	1.8	0.13	ガラス	群青	

番号	遺構名	種類	長さmm	径mm	孔径mm	重量g	材質	色調	備考
J63	石室内覆土	小玉	4.2	6	1.8	0.16	ガラス	群青	
J64	石室内覆土	小玉	3.8	3.8	1.5	0.07	ガラス	青	
J65	石室奥側	小玉	2.6	5.1	1.5	0.08	ガラス	群青	
J66	石室内覆土	小玉	2.6	4.7	2	0.06	ガラス	青	
J67	石室内覆土	小玉	2.9	4.8	1.7	0.08	ガラス	群青	
J68	石室奥側	小玉	2.9	4.1	1.2	0.06	ガラス	青	
J69	石室内覆土	小玉	3.1	3.6	1	0.06	ガラス	青	
J70	石室内覆土	小玉	2.9	3.9	1	0.05	ガラス	群青	
J71	石室内覆土	小玉	4.1	6.4	2	0.22	ガラス	青	
J72	石室内覆土	小玉	5.1	5.9	1.9	0.21	ガラス	群青	
J73	石室内覆土	小玉	3.8	5.3	1.6	0.13	ガラス	群青	
J74	石室内覆土	小玉	4.4	4.6	1.7	0.10	ガラス	群青	
J75	石室奥側	小玉	4.8	5.7	1.3	0.21	ガラス	群青	
J76	石室内覆土	小玉	4.1	5.9	1.5	0.17	ガラス	群青	
J77	石室内覆土	小玉	2.2	5.9	2	0.09	ガラス	青	
J78	石室内覆土	小玉	3.2	5.2	1.3	0.11	ガラス	群青	
J79	石室内覆土	小玉	3.7	5.2	1.7	0.12	ガラス	群青	
J80	石室内覆土	小玉	3.6	5.5	1.5	0.10	ガラス	群青	
J81	石室内覆土	小玉	3.1	5.4	1.7	0.11	ガラス	群青	
J82	石室内覆土	小玉	3.2	5	1.7	0.09	ガラス	青	
J83	石室奥側	小玉	3.9	5.3	1.3	0.14	ガラス	群青	
J84	石室奥側	小玉	4.1	5.4	1.2	0.16	ガラス	群青	
J85	石室奥側	小玉	3.8	5.3	1.9	0.13	ガラス	群青	
J86	石室奥側	小玉	3.8	5	1	0.13	ガラス	群青	
J87	石室奥側	小玉	2.4	3.5	1	0.04	ガラス	赤	
J88	石室内覆土	小玉	1.5	3.4	1	0.03	ガラス	赤	
J89	石室内覆土	小玉	1.7	3.3	1	0.03	ガラス	赤	
J90	石室内覆土	小玉	1.6	2.5	0.8	0.01	ガラス	赤	
J91	石室内覆土	小玉	1.7	2.4	0.7	0.01	ガラス	赤	
J92	石室内覆土	小玉	1.9	2.9	1.2	0.02	ガラス	赤	
J93	石室内覆土	小玉	3.6	5.9	2.5	0.15	ガラス	青	
J94	石室内覆土	小玉	2.6	4.7	1.2	0.07	ガラス	青	
J95	石室内覆土	小玉	3.4	4.7	1.5	0.10	ガラス	水色	
J96	石室内覆土	小玉	3.2	3.8	1	0.07	ガラス	水色	
J97	石室内覆土	小玉	3.1	3.5	1.1	0.05	ガラス	水色	
J98	石室内覆土	小玉	3.4	4.8	1.3	0.09	ガラス	水色	
J99	石室内覆土	小玉	2.2	4	0.8	0.04	ガラス	水色	
J100	石室内覆土	小玉	2.3	4	1.3	0.04	ガラス	水色	
J101	石室内覆土	小玉	2.2	3.9	1	0.04	ガラス	青	
J102	石室奥側	小玉	2.4	4	1.2	0.03	ガラス	青	
J103	石室内覆土	小玉	2.6	3.6	1.2	0.04	ガラス	青	
J104	石室奥側	小玉	2.3	4	1.5	0.04	ガラス	水色	
J105	石室奥側	小玉	1.9	3.9	1.1	0.03	ガラス	水色	
J106	石室内覆土	小玉	2.4	4.1	1.5	0.05	ガラス	青	
J107	石室内覆土	小玉	1.6	2.8	0.7	0.02	ガラス	水色	
J108	石室内覆土	小玉	2.6	4.1	1	0.05	ガラス	黒	
J109	石室奥側	小玉	3.6	4.6	1.2	0.11	ガラス	黄緑	
J110	石室内覆土	小玉	2.7	4	1	0.05	ガラス	黄緑	
J111	石室内覆土	小玉	2	3.5	1	0.03	ガラス	黄緑	
J112	石室内覆土	小玉	2.3	4.6	1.5	0.06	ガラス	緑	
J113	石室内覆土	小玉	2.2	3.7	1	0.04	ガラス	黄緑	
J114	石室奥側	小玉	2.5	3.6	0.7	0.03	ガラス	黄緑	
J115	石室内覆土	小玉	3	3.5	1	0.05	ガラス	水色	
J116	石室内覆土	小玉	3	4.2	1	0.05	ガラス	青	
J117	石室内覆土	小玉	1.9	3.8	0.8	0.02	ガラス	くすんだ水色	
J118	石室内覆土	小玉	3	3	1	0.05	ガラス	くすんだ水色	
J119	石室内覆土	小玉	2.7	3.7	1	0.04	ガラス	くすんだ水色	
J120	石室内覆土	小玉	3	3.4	1.1	0.05	ガラス	くすんだ水色	
J121	石室内覆土	小玉	2.3	3	0.5	0.02	ガラス	くすんだ水色	
J122	石室奥側	小玉	2.5	4	1.1	0.05	ガラス	くすんだ水色	
J123	石室奥側	小玉	1.9	3.5	1.3	0.03	ガラス	くすんだ水色	
J124	石室内覆土	小玉	2.3	4.1	1.2	0.05	ガラス	くすんだ水色	
J125	石室奥側	小玉	3.3	3.2	1	0.04	ガラス	群青	切子玉 (J16) に挟まる

## 報告書抄録

ふりがな	むろおいしゅうたにぐちこふんほか
書名	室尾石生谷口古墳ほか
副書名	主要地方道津山智頭八東線改良工事に伴う発掘調査
卷次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	133
編著者名	小林 利晴 内藤 善史
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL086-224-2111
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むろおいしゅうたにぐちこふん 室尾石生谷口古墳	おかやまけん 岡山県 とまたぐん 苦田郡 かもちょう 加茂町 おおあざあおやぎ 大字青柳 あざいしゅうたにぐち 字石生谷口	33 601		35度 11分 13秒	134度 3分 55秒	1996.9.25 1997.4.8~ 1997.6.26	700m <sup>2</sup>	主要地方道 津山智頭八 東線改良工 事に伴う発 掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝	主な遺物	特記事項
室尾石生谷口古墳 ほか	古墳 鉄滓散布地	古墳時代 近世	古墳 鉄滓集積地	須恵器 鉄器 玉類 鉄滓	古墳時代後期の横穴式石室 石室を守る整然とした石列



図版 2



1 石室内遺物出土  
状況（南から）



2 石室敷石（北から）



3 石室完掘（南から）



1 盛土内石列  
(東から)

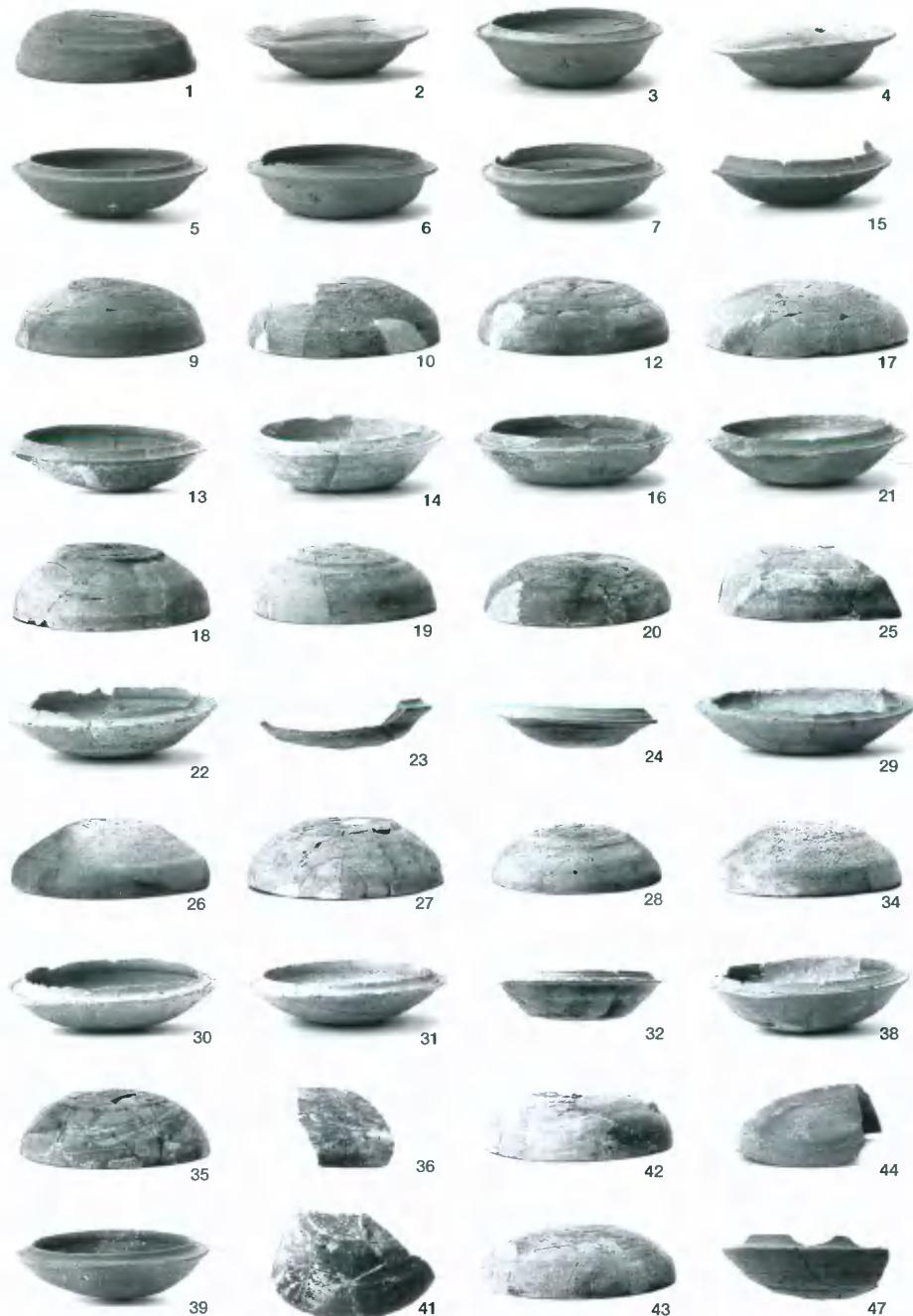


2 石室裏込めと堀方  
(北東から)



3 鉄滓散布地  
(南から)

図版 4



1 石室奥側出土須恵器 1 (1/4)



1 石室奥側出土須恵器 2 (1/4・1/6)



2 敷石下出土須恵器 (1/4・1/6)

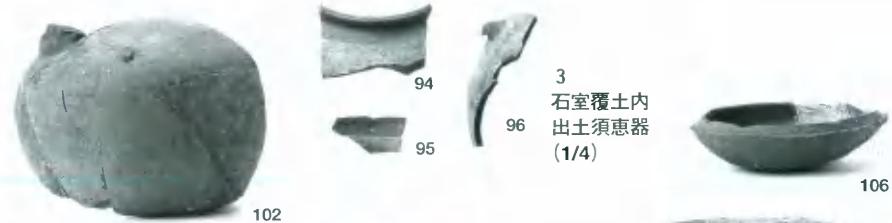


3 敷石上出土須恵器 1 (1/4)

図版 6



1 敷石上出土須恵器 2 (1/4・1/6)



3 石室覆土内  
出土須恵器  
(1/4)

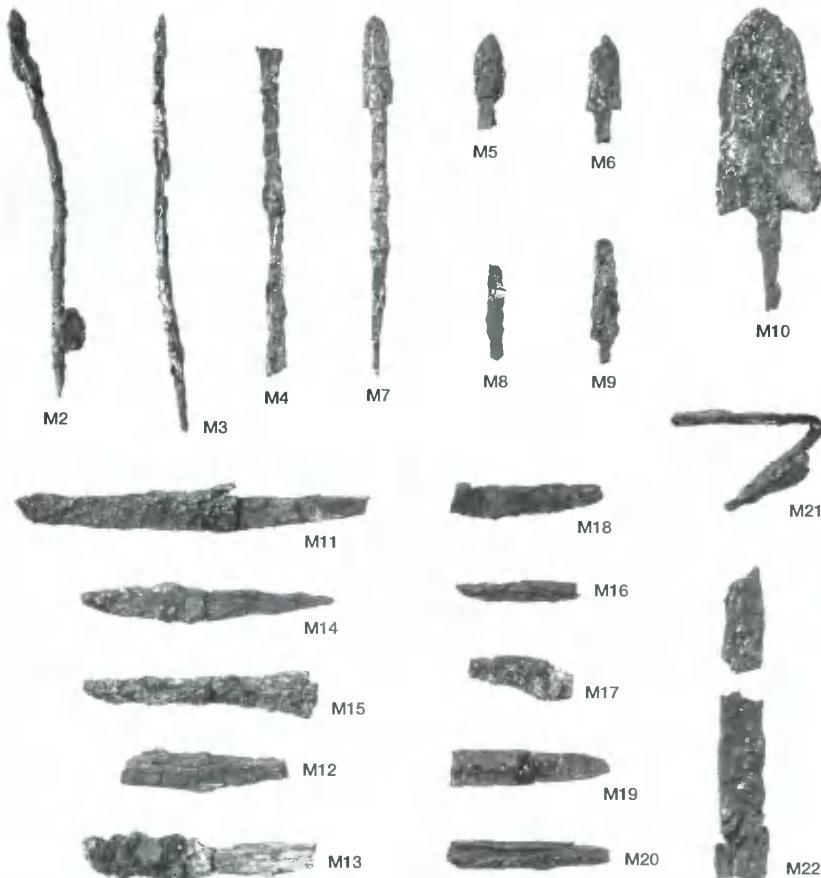


2 石室入口部出土須恵器

4 墳丘盛土内出土須恵器 1 (1/4・1/6)



1 墳丘盛土内出土須恵器 2 (1/6)

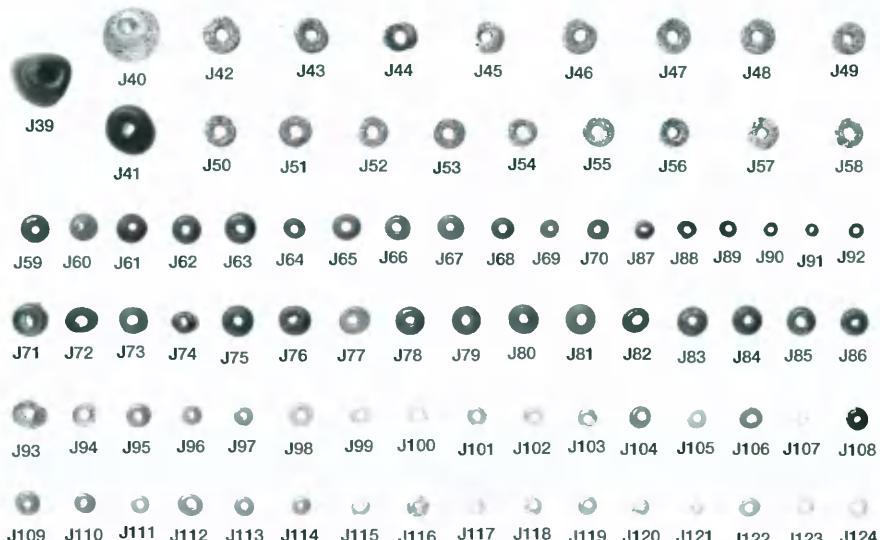


1 石室内出土鉄製品 (1/2)

図版 8



1 表採鉄刀 (1/3)



2 石室内出土玉類 (1/1)



3 石室内出土人骨 (1/2)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告133

## 室尾石生谷口古墳ほか

主要地方道津山智頭八束線  
改良工事に伴う発掘調査

1998年3月27日 印刷  
1998年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3  
発 行 岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6  
印 刷 西尾総合印刷株式会社